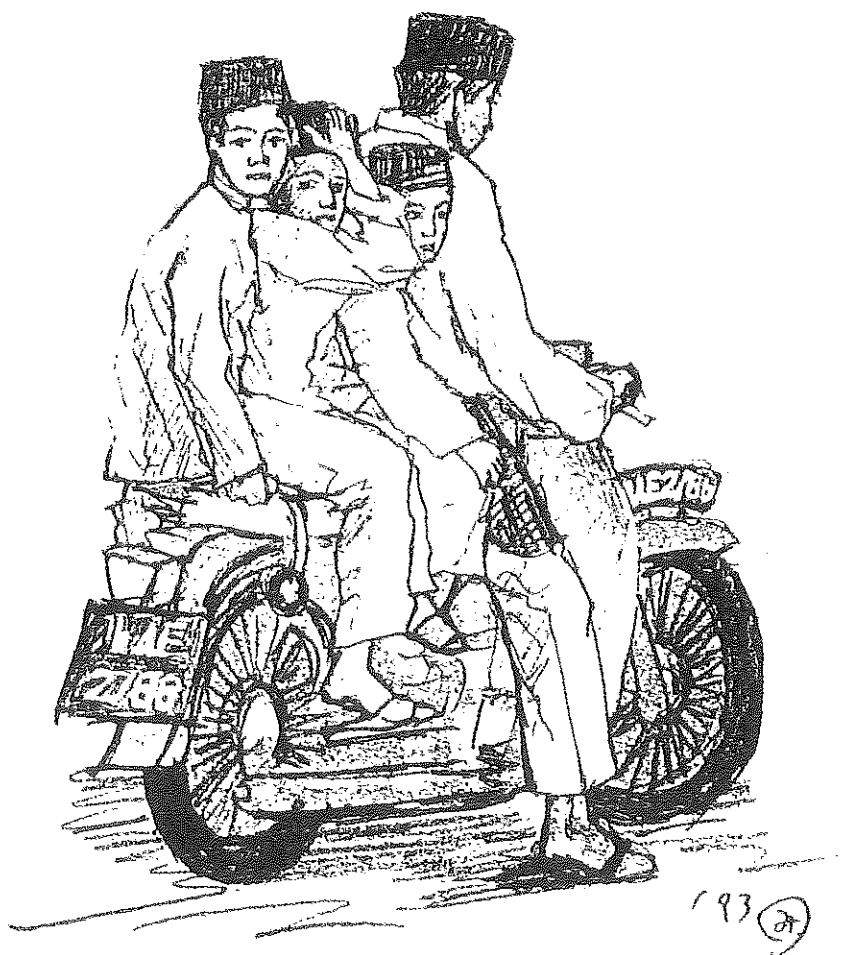


※※※

マリ キタ プルギ
Mari Kita Pergi

カ カンポン テラガ アイール
Ke Kg, Telaga Air

※※※



第3回 鹿児島県青少年海外協力体験事業報告書

鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

はじめに

ここに、第3回鹿児島県青少年海外協力体験事業の報告書「Mari Kita Pergi Ke Kg, Telaga Air. (テラガアイール村へ行こう)」をとりまとめました。

青年海外協力隊の活動現場を春秋に富む感性豊かな青少年に体験してもらうこの事業を全国にさきがけて実施し、しかも3回継続して成功の内に終了できましたことは、率直に申し上げて大きな喜びであります。

特に今回は、国連平和維持活動(PKO)をはじめ我が国の国際協力のあり方について、国内はもとより世界の関心と論議がこれまでにない高まりをみせている中での事業実施でありましたので、実行委員会一同この事業の意義が一段と高まったことに感慨深いものがござります。それだけに、ここに集録された訪問団員の実体験の一つひとつが、単に当人たちの貴重な記録にとどまらず、何らかの形で県内外の若い世代に国際協力への関心と理解を喚起し、若者の選択に値するすばらしい行動の芽生えにつながっていく契機になればと願うものであります。

この事業の実施に御協力いただきました国際協力事業団、日本国際協力センターをはじめ鹿児島県御当局並びに関係機関団体、同行取材をいただいた南日本新聞社、鹿児島放送テレビの方々には厚くお礼を申し上げます。また、現地で御尽力賜った各機関団体やホームステイ家族の方々に心から感謝の意を表する次第であります。

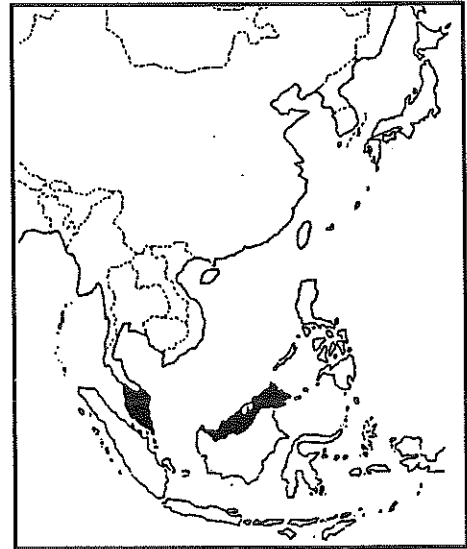
当実行委員会といたしましては、来年度以降もこの事業を継続して実施する所存でありますので、今後とも関係方面の一層の御指導・御支援をお願い申し上げまして、事業報告の御挨拶とさせていただきます。

平成5年10月1日

鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会
会長 浜之上 久志

マレーシア略記

〔位置図〕



〔主要指標〕

総面積：330,434km²
総人口：1,829.4万人（91年）
主要民族：マレー系及び先住民族 58.6%
 中国系 32.1%
 インド系 8.6%
国民総生産：457.9億ドル（91年）
1人当たり国民総生産：2,490ドル（91年）
経済成長率：5.6%（80年～91年）

目 次

◆はじめに	
◆マレーシア略記	
◆ごあいさつ	
鹿児島県総務部国際交流課長 宿口 豊城	1
◆事業概要	2
事業趣旨	
事業主体	
訪問団員名簿	
訪問日程	
◆行動の記録	5
◆訪問手記	13
「私の夢」	中野 葉 月..... 13
本物の国際貢献	中 園 徹..... 16
「日本」と「マレーシア」とのちがい	三 窪 絵 理..... 19
「自然との共存」	上 岡 正 吾..... 22
「ともに生きる」ことの大切さ	福 永 葵..... 24
教えながら学ぶ	加 藤 剣 竜..... 26
村人に接して	福 川 真理子..... 29
ホームステイと協力隊	三 島 隆 志..... 32
「心の優しさ」にふれて	濱 田 孝 子..... 35
真のボランティア精神	安慶名 龍 巳..... 39
◆マレーシアあれこれ	41
◆第3回体験事業を終えて	
訪問団団長 弓場 秋信	45
◆事業関係の新聞記事	46

《イラスト…宮蘭広幸 青年海外協力隊鹿児島県OB会》

(クアラルンプール日本人学校勤務)

ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長

宿 口 豊 城

第3回鹿児島県青少年海外協力体験事業の成功おめでとうございます。

「国際協力」という言葉はあらゆる場面で用いられます。しかし、国際協力とはどんなものでしょうか。日本に住んでいる我々にできる国際協力には何があるでしょうか。おそらく、この事業に参加された皆さんには、それぞれ自分なりの答えがあるはずです。そしてそれらは、すべて正しい答えになると思います。

日本人のできる「国際協力」には様々な種類がありますが、その中でも、皆さんが体験された青年海外協力隊活動は最も派遣先の国々の人々と触れ合うことができる国際協力です。若い時代に異なる文化・価値観を体験することの素晴らしさは、この事業に参加された皆さんそれぞれが体験されたことですが、私どもは、その経験を無駄にされることなく今後活かしていただきたいと思います。

県においても、青年海外協力隊の支援及び研修生等の受入れを行う「海外技術協力等推進事業」、「アジア・太平洋農村研修村」の整備、「鹿児島・香港交流会議」、「世界へはばたけ鹿児島青年事業」、「国際交流女性のつどい」など様々な事業を実施しています。また、鉄砲伝来450周年に当たる今年は、「鹿児島・ポルトガル友好450周年記念事業」を実施し、近隣諸国との交流だけでなく、長い歴史を有するポルトガルとの交流事業を積極的に推進しています。

皆さんが今回体験されたのは、マレーシアにおける青年海外協力事業ですが、世界には様々な国々があります。今回の事業で体得されたマレーシアの奥深さや優しさは、あらゆる国々がもっていることです。これからも、常に開かれた視点で国際社会に積極的に参加していただけることを信じています。

最後に、この事業を実施された青年海外協力隊鹿児島県OB会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、財団法人鹿児島県国際交流協会、また、この事業の実施に当たりいろいろな協力支援をいただいた国際協力事業団及び同青年海外協力隊事務局の皆さんに心から敬意を表するとともに、この事業のますますの充実を希望します。

事業概要

事業趣旨

鹿児島県の青少年が、開発途上国で国づくりに貢献している協力隊員の活動現場を訪問し、その技術援助活動や、そこで繰り広げられる隊員と現地の人々との交流を一緒に体験することにより、国際協力に対する理解を深めるとともにマレーシアと鹿児島との親善を深める。

また、日本とポルトガルの交流450周年を記念し、ポルトガルゆかりの地マラッカを訪問し、鹿児島と西欧との交流の歴史を学ぶ。

事業主体

主催 鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

〔 青年海外協力隊鹿児島県OB会
（財）鹿児島県国際交流協会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 〕

共催 （財）日本国際協力センター

後援 国際協力事業団・国際協力事業団青年海外協力隊事務局
（社）青年海外協力協会・鹿児島県・鹿児島県教育委員会
鹿児島県高等学校国際研究協議会
南日本新聞社・鹿児島新報社・西日本新聞社
日本経済新聞社・読売新聞社・毎日新聞社
朝日新聞社・南海日日新聞社・NHK鹿児島放送局
南日本放送・鹿児島テレビ・鹿児島放送

協賛 （財）古謝育英会

協力 サラワク州土地開発省・マレーシア航空

訪問団員名簿

(訪問団員)

氏名	学校名	学年	住所	備考
安慶名 龍 巳	片泊中学校	2	三島村	
上 岡 正 吾	高山中学校	3	高山町	
濱 田 孝 子	日当山中学校	3	隼人町	
三 窪 絵 理	明和中学校	1	鹿児島市	
加 藤 剣 竜	志布志高校	1	志布志町	内之浦町出身
三 島 隆 志	鹿児島中央高校	1	鹿児島市	
中 園 徹	鶴丸高校	1	鹿児島市	
福 永 葵	錦江湾高校	1	鹿児島市	
中 野 葉 月	れいめい高校	2	鹿児島市	
福 川 真理子	加世田女子高校	2	加世田市	徳之島町出身

(同行者)

氏名	所属	備考
弓 場 秋 信	青年海外協力隊鹿児島県OB会顧問	訪問団団長
橋 口 和 典	青年海外協力隊鹿児島県OB会事務局長	
斎 藤 紀 子	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
宮 園 夏 美	青年海外協力隊鹿児島県OB会	クアラルンプール在住
吉 岡 真 樹	(財)鹿児島県国際交流協会	
湯 田 澄 春	(株)鹿児島テレビ放送(出水支局長)	
柴 立 浩 一	(株)南日本新聞社 社会部	

訪問日程

平成5年7月23日～平成5年7月30日

- 7月23日（金） 結団式（鹿児島空港出発ロビー内）
鹿児島空港発
クアラルンプール空港着
ホテル泊
- 7月24日（土） クアラルンプール空港発
クチン空港着
〔 サラワク博物館見学
クチン市内のサンデーマーケット見学 〕 クチン市内視察
青年海外協力隊員（7名）との懇談会
テラガアイール村で歓迎式
ホームステイ
- 7月25日（日） 協力体験活動（養鶏プロジェクト）
テラガアイール小学校訪問
記念植樹
学生及び村人とのスポーツ交流
ホームステイ
- 7月26日（月） 村内自治会（JKKK）による村内活動紹介及び村落開発プロジェクト概要説明
村内記念植樹
現地中学校（SMK Matang I）との交流会
土地開発省主催 晩餐会
ホームステイ
- 7月27日（火） JICAプロジェクト視察（SARAWAK UMUM HOSPITAL）
病院施設の見学及び説明
JICAプロジェクトの説明
JICAプロジェクト専門家（3名）との懇談会
お別れパーティー
ホームステイ
- 7月28日（水） クチン空港発
クアラルンプール空港着
国際協力事業団マレーシア事務所を表敬訪問
ホテル泊
- 7月29日（木） マラッカ（鹿児島・ポルトガル友好450周年にちなむザビエルゆかりの地）視察
（ゴム園，セント・ポール教会，サンチャゴ砦，マラッカ海峡）
機内泊
- 7月30日（金） クアラルンプール空港発
鹿児島空港着

行動の記録

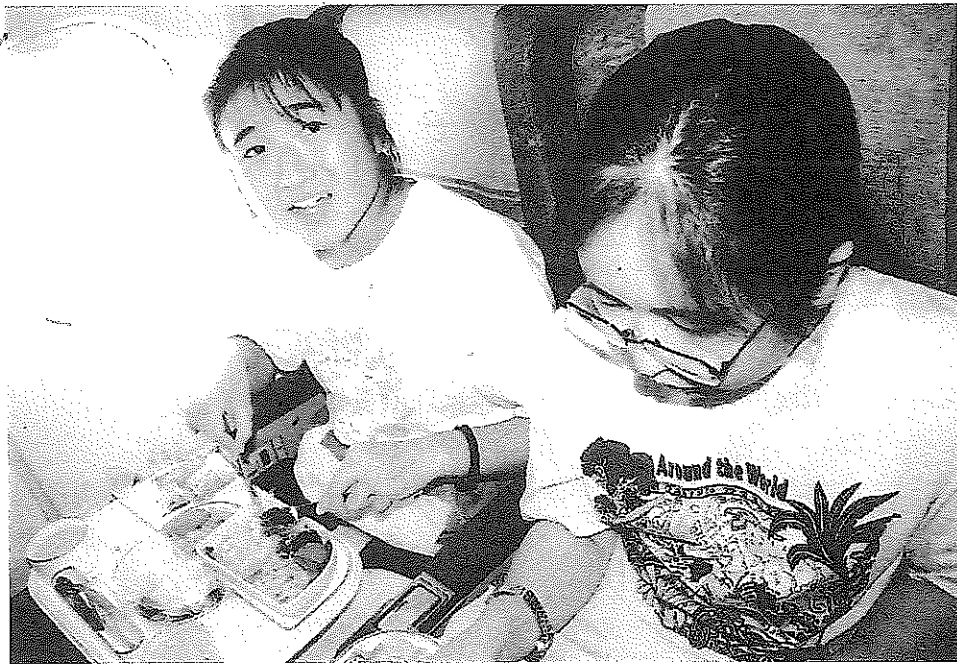
7月23日（金）

1日目

福永 葵

昨日は、あまり眠れなかったような気がします。今日、とうとうマレーシアに行くことができます。なんだか夢のようで、でも現実であってほしい気持ちです。結団式にはたくさんの人達や、おまけに、テレビカメラもあってはずかしかったです。両親は、心配そうな目を見ていたけれど、私はなんだかウキウキして、飛行機の出発がまちきれませんでした。長い時間、飛行機にゆられて、やっと着いたマレーシア。私の想像していたマレーシアと、天と地ほどの差があったのには、とっても驚きました。ビルが立ち並び、車がたくさん通って、本

当ににぎやかな所でした。ときどき自分でも、「ここが本当にマレーシアなのか？」という気持ちもありました。空港まで迎えに来てくれていた添乗員がすっごく楽しい人で、「こんな人もいるんだ」と思いました。ホテルがとってもきれいで、部屋も広かったのうれしいでした。食事がとっても辛かったけれど、デザートがとってもおいしかったです。初めての海外での一日は驚いてばかりだったけれど、楽しかったです。あんまり楽しすぎて、明日からのホームステイが、とてもまちどおしく、そして、これからの生活に自分なりに自信を持つことができました。



7月24日（土）

2日目

上岡 正吾

今日は朝7時にモーニングコールで起き、朝食をとる。その後8:30にホテルを出発。9:30に空港に着く。昨日長時間飛行機に乗ったせいか、こしが少しいたむ。今日もあわせて2日も乗ると流石に慣れる。約1時間40分かけてクチンに着く（クチン＝ネコ）。クチンではまず、サラワク博物館を見学した。とくにおもしろいと思ったのは、住居だった。木や竹をくんで作られた家は、結構がんじょうだった。それとやたら人の頭ガイ骨も多かった。家の中にかざるのには適さないと思う。サラワク博物館を後に、サンデーマーケットへと向かった。このマーケットは物があふれ、クチンに住んでいけば、たいがいものはそろうだろうと

思った。ここでは、特に目をひくものはなかった。ここでサロンを買って、ドリアンを食べた。サンデーマーケットから一路シビックセンターへと向かった。シビックセンターで食事をとり、青年海外協力隊員と懇談した。それから、ホームステイ先へと向かった。テラガアイル村へと着いた。着いた時、待っていたのは、熱烈な歓迎だった。生まれてはじめて、もうこれからのもないような歓迎式をしてもらった。歓迎式、対面式と終わり、ホームステイする家へと向かった。ちなみにボクのマレイシアネームは、“タジュリン”だった。家へ着くと、特別することもなく、父さんに日本語を教えたくらいで、すぐ床についた。明日からはもっとたくさんしゃべろうと思う。



7月25日（日）

3日目

中園 徹

今日は、朝早くお母さんに起こされた。「そうだ、養鶏場に行くんだった。」みんなほとんど起きていた。軽い朝食をすませて、村の店が集まっているところへ行く。みんなと会えてうれしい。2台のワゴンで少し走った隣り村の農家を訪れた。少しにおう小屋の中で、水かえとえさやりをした。なにか、昔の日本の農家みたいだった。言葉がぜんぜん通じなかったが、その農家のおじさんは、身ぶり手ぶりで教えてくれた。仕事ははやくすんだので、お茶とお菓子をごちそうしてくれた。その家では、テレビで「ドラえもん」をやっていた。すこし驚いた。こっちは人は、よくミロを飲んでいるらしい。そうこうしているうちに、弓場さんと菊地さんたちがやって来た。さっき、弓場さんたちが行ってしまったときは、はっきり言って少し不安だった。帰って、準備をして、海へ行った。テラガアールの船場からサンティン・リゾートへ行った。水の上をモーターボートで行くのは、とても気持ちがよかった。マングローブのジャングルがとてもきれいだった。なんだかとってもさわやかな気持ちになった。サンティン・リゾートの海は、とてもきれいだった。海岸の砂は、細かい粒の砂ですぐ濁る。海の水は、日本よりずっと塩辛かった。潮風が気持ちいい。テラガアールへ戻って、小学校へ行って、記念植樹をした。みんなそれぞれ、ドリアンやスターフルーツの苗木を植えた。それぞれの

木には植えた人の名前がついて、その土地には「かごしま」という名がつくらしい。そのあと、村の小学生とスポーツ交換会があった。暑い中、たいへんだったが、とてもおもしろかった。そのあとは、村の選手たちとセパタクローをした。選手たちは、さすがに上手い。僕たちもした。思ったよりも難しい。しかし、おもしろいゲームだ。日本でもすればいいと思う。夜はホームステイ先でくつろいだ。三女の女の子が明日から学校だと地理の勉強をしていた。その内容は、初めは、方位や縮尺の方法から始まって、気温や降水量と、日本の地理の勉強と同じだった。彼女のノートを見ると、全部「✓」とするしがついていた。全部間違っているのかと思ったが、これはチェックのしるしのようなのだ。カセットレコーダーがあったので、小野正利の曲をかけた。すると、彼女たちは、「サヨナラ」という言葉に反応した。日本語を少しは知っているようだった。



7月26日（月）

4 日目

三窪 絵理

今日は、朝から村内自治会役員との意見交換会がありました。この人たちの話は、いろいろ聞きました。中でも、自分のマレイシアネーム（の名前）は、だれの名なのかを教えてくださいました。わたしの名前の人は、環境大臣の奥さんだったらしいです。そして、一番わたしがびっくりしたことは、村の開発費が、3年間で「3億5000万円」だった、ということです。そして今、村は進んできています。でも、電気は、去年ついたということで、まだ、電気の通っていない所もあるそうです。わたしたちの日本は、すすんでいるということが、こんなところでもわかりました。そして、この次に行った所は、村からちょっとはなれた中学校でした。中学校は、とても広くて、日本とは全くちがう感じがしました。中学校に着いてバスからおりた時、またまた、中学校の生徒たちが、一列に男女別々に並んでわたしたちを迎えてくれました。わたした

ちが、女子から、あく手して行って、男子とあく手しようとした時、生徒の男子が「できません」のように、手を横にふり、わたしたち女子とのあく手をしませんでした。わたしは、どうしてあく手してくれないのだろうと疑問に思って、あとから聞いてみると、宗教上の関係で、男子と女子は手をふれあってはいけないそうなのです。じゃあ休み時間とかは？とか、疑問になったのですが、あとの質疑応答の時、教えてもらいました。そして、食事の時、急に生徒の女子の1人が話しかけてきました。わたしは急だったので、ちょっととまどいました。けどあとからはもう、友達みたいになかよくなって、言葉も関係なくなかよくなりました。けど別れの時はやってくるもので、もう友達になれたという時には、さようならみたいになってしまいます。バスに乗って別れるとき、生徒たちは、大きく手をふって別れました。でも、友達になったのだからとちょっと安心していました。



7月27日(火)

5日目

中野 葉月

JICA救急医療プロジェクトを見学。

あらためて、違いを感じた。何を重要とするかの違いである。つまり、日本では傷を回復させることに重点をおいている。例えば、火傷したとしたら、いかに傷跡を残さず回復させるかといったふうである。しかし、マレーシアにおいては、回復後の社会復帰を最も重要なことと考えているらしい。リハビリの施設が整っていたのは、そのためである。

リハビリ施設の充実…こんな面においても、マレーシアにおいて、より多くの労働力が必要とされていることがうかがわれた。

家へ帰ると(昼頃)、mandiをしてから、'Malaysian traditional cake'を食べた。母がつくってくれたのである。実を言うと…、あまりおいしくなかった。しかし「sedap?」=オイシイか? と聞かれて、「tida」=イイエとは言えなかった。「Ya, sedap sedap」といって3きれほど、一生懸命食べた。そのとき母が「Zaharah (私のマレーシアネーム), don't forget my family, you back to japan, you send me photo, O. K. ?」と言った。そうか、この家のベッドで眠るのは今夜で終わりなんだ。そう思うと、何だか急に「さびしい」という言葉が頭をよぎった。もうお別れパーティーなんて、嘘だ。3日前の夜、この村に到着したばかりなのに、あっという間に…。

Malaysian traditional clothesを身にまとった団員達はもうすっかりマレー人だ。

送別会はあっという間に、夢でも見ているような感じで終わった。このときの感情を強いて言葉で表すと、「幸せ」と「悲しみ」である。

「幸せ」…こんなに温かく、至れり尽くせりもてなしていただいていることに対して、言葉が通じない、お互いの日常を知らない同士で心が通じ合っている。いや、知らない者同士だからこそ、心で触れ合うことができるのかも知れない。そこには、利害関係を考える表向きだけのやりとりなど絶対にあり得ないのだ。「幸せ」そのものである。

「悲しみ」…こんなに優しい村人達とも明日の朝にはもうお別れ、ずっと一緒に…とは言わないが、4泊とはあまりに短かすぎた。母とバドミントンしようと約束したのに、ついに時間がとれなかった。子供達に折り鶴を教えている途中だったのに…。それにイダという3歳の男の子が、やっとなついてくれたばかりなのに…。何もかも今から始まるように思えてならない…。なのに、さよならなんだ。

おやすみなさい。お母さん、明日の朝は早く起こしてね。

Mandi Pagiをやりたいのです。最後のmandiを。



7月28日（水）

6日目

三島 隆志

朝起きると同時に、別れと言う言葉が僕の耳から離れなかった。

いよいよ今日は、テラガアイール村に別れを告げ、クアラルンプールへと向かう日だ。

ホームステイの初日は、言葉が全く通じず、あまりいっしょにいたくはなかったのに、いつの間にか、自然と家族に溶け込み、今ではここにずっといたい。日本へ帰りたくないと思える様になっていた。その為か、家で荷物の整理をしても、なんとなくさみしい様な、がまんできない様な、いてもたってもいられない気持ちになり、涙を押さえることができなかった。僕達は、涙とともに、テラガアイール村をあとにし

て、空港へと向かった。数十人の村人達も、わざわざ空港まで見送りにきてくれて、せっかく忘れていた涙が、又、とめどもなく流れおちた。そして、2度目の「さよなら」を言った。飛行機はクチンを飛び立ち、クアラルンプールへ着いた。

さっそく、JICAの事務所を訪問し、草野次長より、マレーシアの発展の様子や、協力隊員の活動状況などを詳しく伺った。草野次長は、国際協力には、「人と人とのつながりが大切だ。」とおっしゃっていた。僕も4泊5日のホームステイを通して、そのことを実感していた。久しぶりのホテルのベッドは快適ではあったが、人々の暖かさの残るテラガアイール村のベッドが、やけに恋しかった。



7月29日 (木)

7日目

福川 真理子

マレーシア最後の日。

マラッカに行き、ザビエル教会、サン
チャゴ砦、マラッカ海峡などを見る。

教会はまっ赤だった。私としては教会と
いうと、白いというイメージがあったので、
すごく印象的だった。この辺りは、スタダ
イスと呼ばれ、オランダの建築物である。

ザビエルの像もあった。その像には、
ちょっとした逸話があって、独特の奇蹟の
話だったのだが、私には、ホラーな話でコ
ワかった。

牛車に乗った。初めて乗ったのだが、
けっこうゆれて、あぶなっかしかった。牛
には、やっぱり闘牛のイメージがあって、
コワイ。乗り物に乗るのは楽かもしれない
けど、歩く方がいいと思った。



7月30日（金）

8日目

濱田 孝子

ただ今、真夜中の2:00です。

クアラルンプールから福岡へ向かう飛行機の中で書いています。あと数時間で、この旅も終わりを告げようとしています。

ホームステイの初日、全然言葉も通じず、とまどうことが多かったですが、日にちが経つにつれて、だんだん慣れてきて、不安なんてなくなりました。

なんと言っても困ったことは、トイレとマンディでした。でもそれらも、ホームステイ先の家族が親切にしてくれて、だいぶ助かりました。

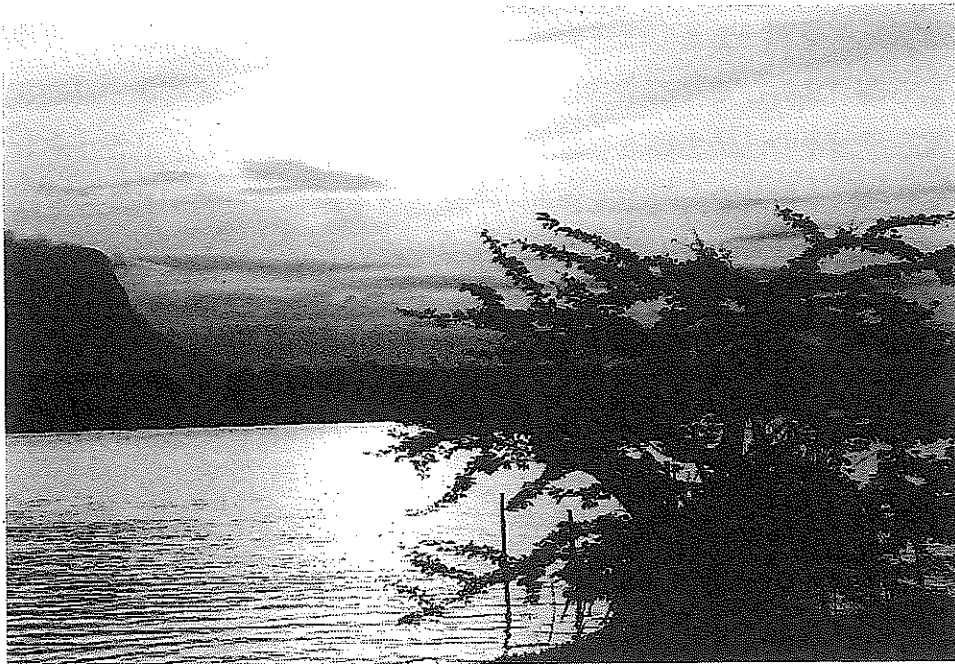
それから、「普通の水」を飲みたいと言っても、いつも、甘いジュースしか出してもらえず、それには弱ってしまいました。

村の人は、air（水）と言えば、ジュースのことだと思っている様でした。

あと少して、みんなともお別れですが、クアラルンプール、クチン、テラガアイール村、マラッカ、どの場所も大変印象深いです。この体験は、一生の思い出となるでしょう。日本へ帰ったら、クラスのみんやや多くの人に、マレーシアの良さを伝えていこうと思います。マレーシアは、まだ一部には、電気や水道のない所もあると聞いています。これからどんどん開発され、発展して行くと思います。

いつまでも優しい心を忘れずに、元気でいて欲しいと思います。

そして、又、いつの日か、私もマレーシアを訪れてみたいです。



訪問手記

「私の夢」



誰かの役に立ちたい。医療関係の職に就いて、開発途上国へ行きたい。

—これが私の夢である。

しかし一方では、大きな疑問があった。それは近代医学をもって、土着の伝統医療を否定し得るかということである。

近代医学の方が土着の伝統医療よりも、患者を回復させる確実性、またその速さという点で優れているということは言うまでもない。つまり、近代医学の方が、合理的という面で勝っているのである。

しかし、医学を文化という面からとらえるとき、果たして合理的という理由だけで、他民族の文化を否定することが許されるであろうか。世界には、まだまだ祈禱や薬草などによって病氣や傷手から回復するという医療手段をとっている民族がたくさんいる。日本人なら、非科学的と見るような手

中野 葉月

(れいめい高等学校2年)

段であっても、土着の医療手段（つまり、祈禱や薬草など）が、彼らにとっての一つの文化であることは間違いない。臓器移植やハイテク医療器具が、日本やドイツなどの先進国によって、開発、改良されたという事実も先に述べたことと同様に、一つの文化である。

どちらが優れているのか、答えられようか、文化に優劣がつけられようかということである。

このことは、何も医療に関してのみ言えることではない。学問についても同様である。文字のある文化とない文化。識字率を高めようとする運動は、果たして正しいと言いきれるのか。子供でさえも大切な労働力とされている国々では、親は子供に学問を修得させることを必要と考えているのか。文化という側面からだけでなく、必要性という面から考えても疑問は募りに募る。

ひょっとしたら、私が夢として抱いていたこと、「途上国の人々の為に働きたい」ということは、単に自分自身の良心を満足させるためだけの目的しか持たないのではないか。正義を盾としたエゴにすぎないのではないか。

ややもすると、私自身、開発途上国に住

む人々を見下しているのではないだろうか。「彼らを援助してあげたい。彼らの為に…」この考え方自体、途上国の人々を貧困で、自立心に欠けるとみなすような偏見を含んでいるような気がする。

その様な大きな疑問を胸に、7月24日、首都クアラルンプールから、クチンの郊外、テラガアール村へと発った。

村は、私の想像とは全く違い、かなり発展していた。何故「開発途上」と呼ばれているのか不思議に思うほどであった。鹿児島山村と大した違いもないようなのに。

村人に生活上不便な様子は見られなかった。衣、食、住、きちんと備わっているのだ。のみならず、車やテレビ、ステレオなどを所有している家庭も大多数である。

風呂やトイレの用法は、事前に聞いていたとおり、日本とは異なるものであった。風呂は、サロンと呼ばれる布を体に巻き、そのまま水を浴びる。トイレは自動水洗ではなく手動水洗、つまり、自分で水を持ってきて左手で汚物を処理するのだ。

しかし、日本と全く異なるものとは思わなかった。マンディ（風呂）は、日本で私の祖母の世代に行っていたといわれる行水に似ているし、トイレも同様である。風呂、トイレは、日本をほんの50年ほど前にタイムスリップさせただけと言えよう。

村の生活に比べると、日本での私の生活はたいへん便利である。スイッチを押すだけで、たいていのことを機械がやってくれる。掃除、洗濯、食事の準備、そしてその後始末…ありとあらゆるところで、人手と時間が省かれる。その機械によって省かれ

た時間を、勉強、趣味や余暇などに宛がうことができる。

この便利な生活のことを人々は「文明人らしい生活」とし、あたかもこれが「正しい生活」であるかのような言い方をする。そして、自分達とは異なる生活、つまり直に人間の手によって物を作り、家事をしているという生活を「生活水準が低い」と言う。また、そのような生活をしている人々を「貧困な人達」と呼んだりもする。そこには「何てかわいそうな」といった哀れみの感情がある。

しかし、村での生活は、私に哀れみの感情を抱かせることなどなかった。村に住む方々はいつも屈託のない笑顔を浮かべ、生活に不自由している様子ではなかった。それどころか、「It is a Malaysian style!」とあって、誇らしげに、生活様式について説明してくれた。

彼らが幸せそうで、自分達の生活に誇りを持っていることに驚き、とともに、自分の心の中に潜んでいた「彼らは非文化的で貧しい人々だ」という偏見を感じた。そしてこんな自分を恥じるばかりであった。

「開発途上国」と聞いて、私達が想像する国、またそこに住む人々に対して抱く感情は、どのようなものであろうか。きっと、「貧困な国」、「かわいそうな人々」というような、漠然としつつも同情を含んだものであろう。そのうえ大多数の人が「援助してあげたい、我々豊かな日本人の手で何とかしてあげたい」そう考えるに違いない。私もそのひとりであった。

しかし、村の方々と4日間過ごして帰国

した今、私は「彼らの為に…」とは思わない。先に述べたように、「途上国の人々を援助してあげたい」という私の抱いていた夢が、実はその言葉の裏に、途上国に住む人々に対する大きな偏見を含んでいること、そして「私は文明人」といわんばかりの自分自身の傲慢さに気が付いたからである。

私は自分の思想を正当化し、謙虚に装いつつ、心の中に潜むおごりというものには気付かないでいたのだ。村での生活で何度も「ハッ」とさせられた。おごっている自尊心を打ちのめさせられるような気さえした。

いよいよクチンを発つという日、協力隊の一員として現地で活動していらっしやる理学療法士の久野さんから、長い手紙をいただいた。その手紙は、「近代医学をもって、土着の伝統医療を否定し得るか」という私の疑問に答えてくださったのみならず、人間としての生き方の原点に迫るものであった。

「誰かの為に生きてい…ということは、若い世代の人なら誰でも考えることで、一般的に素晴らしいこととされている。しかし、誰かの為に生きるという思想は、自分が他人の人生を変えてしまうという思想と同質のものである。そうしたことは不可能で、また、あってはならないことだ。『誰かの為に』ではなく、『誰かと一緒に』という思想こそが、国際社会の中で、また人間として生きていく上で最も重要なものである。」と、久野さんは手紙の中でおっしゃっていらっしやった。私の傲慢な思想を見透かしていらっしやったようで、ここ

で再び自分自身を恥じる次第であった。

村での生活、久野さんからいただいた手紙、これらによって受けたショックとともに、心の中のおごりに気付き、旅行以前に持っていた疑問の解答に近づくことができた。

医療、学問、などすべてを含めて、開発途上国に住む人々の生活は否定し得ないのだ。また、否定は許されないことである。

つまり、一方的に私達の生活様式を「素晴らしい、正しい生活」と決めつけ、途上国の人々にそれを強いるのではなく、不足し、かつ必要とするものを相補っていくところこそが重要なのだ。そうすることで、真の国際協力を果たすことができるといえよう。

開発途上国で働きたい。医療関係の職に就いて、現地の人々と一緒に暮らしたい。そして、必要に応じてお互いの不足した面を相補うことができれば、どんなに素晴らしいことであろうか。

—これが今現在の私の夢である。



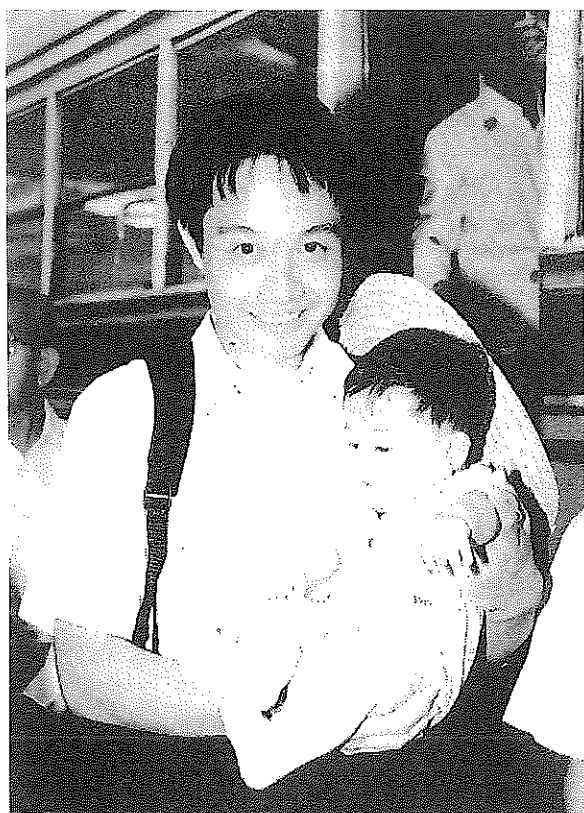
本物の国際貢献

中園 徹

(鶴丸高等学校1年)

「青年海外協力隊の活動を見ること」、僕は今回の体験事業での一番の目的がこれだったと思う。僕自身、前々から国際協力の仕事に就きたいと思っていたので、是非外国へ行ってみたいかった。だが、マレーシアへ行って見て、僕は国と国との交流に貢献することがいかに難しいことかを痛感させられた。僕は今まで青年海外協力隊の活動は、井戸を掘ったり、農作物を植えたりと開発途上国の人々への技術提供でしかないと思っていた。もちろん、それは僕の大きな思い違いだった。

僕たちがホームステイしたテラガアイール村は、人口約750人の小さな村だった。



州都クチンから小さなバスでゆられて約40分、村に着いた時はもう真っ暗だった。それなのに村人全員で出迎えてくれた。握手を交わすどの人も僕たちに笑顔で接してくれた。歓迎式も盛大なもので、最後に団員と随行員全員にマレーシア語の名前をもらった。僕の名前はSULAIMAN (スライマン) という名前でマレーシアの文部大臣の名前だそうだ。何にしてもすごい歓迎で本当にうれしかった。歓迎パーティーが終わったあと、ホームステイファミリーの家へ行った。パーティー会場から家までその家のお父さんが僕の重いトランクを持ってくれた。僕が慣れないマレー語で「ありがとう」と言うと「ドウイタシマシテ」と日本語で返してくれた。僕の部屋は今度新しく仕切ってくれたらしく、板の壁のペンキがまだ光っていた。僕の部屋には家に一つしかないベッドもあったし、外出して帰ってくるといつも部屋にコーヒーとお菓子が運ばれてきた。とにかくすごい親切ぶりだった。食事のときには、お母さんが腕を振って料理を作ってくれたので「スタップ (おいしい)」と言うとみんな喜んでくれたし、僕がマレー語の辞書を引き引き「これを洗濯したい」と言うと「そこに置いておきなさい明日、洗ってあげるから」と言ってくれた。僕は赤の他人だし、ましてや遠い国から来たどういう人かわからな

いのに。最後のお別れパーティーの後はこちらで運よく少し英語が話せる一番上のお姉さんが来てくれて、いろいろな話ができ。みんなとマレー語を使って話せなかったのは残念だったが、今まで話しかけた日本での僕の身のまわりのことが言えてうれしかった。その夜は、夜中の二時すぎまで話にふけてしまった。次の日、僕を家族全員でバスのところまで見送りにきてくれた。お姉さんは日本語学校があったのでできなかったが、お父さんとお母さんは空港まで送ってくれた。空港ロビーでの最後のお別れのときは、お父さんもお母さんも泣いていた。僕はお父さん、お母さんを悲しませないよう必死で涙をこらえた。しかし、出国手続きを終えると目頭が熱くなるのをおさえることができなかった。僕はマレー語が少ししか話せなかったが、何といおうか心と心で話すと言うか、僕が言いたいと思ったことは相手の人が理解してくれた。このことが一番うれしかった。本当にホームステイ先の家族の人たちはいい人たちばかりだった。

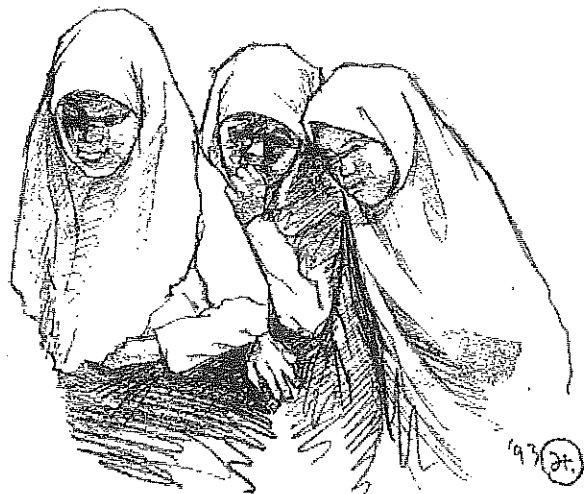
僕は、このホームステイで言葉の大切さ・重要さを知らされた。きちんとその国の言葉をマスターしていたら、その国のいろいろな人と話ができるし、その人たちと日本人との考え方や価値観の違いを知ることができるだろう。だが、僕が学んだことは少し違う。確かに言葉をじっくり学んで外国へ行けば、言葉を少ししか話せないよりもたくさんのことを得ることができる。しかし、僕らはもっとチャレンジの精神があっ

とにかくやってみる、とにかく人と話してみる。そうすると、道はひらけるのだ。僕は今回の体験事業ではできるだけそうするよう努めたつもりだ。だから、家族の人たちも分かってくれて、あんなに親切にしてくれたし、僕も家族みんなのことが好きになれたと思う。

世界は本当に広い。この同じ空の下で何十億という人々が暮らしている。若いうちに、この狭い日本から飛び出して外国に触れることができたのは本当によかったと思う。僕は、もっと違う国にも行ってその国の考え方・物の見方を学んでみたい。そのための一番の近道が青年海外協力隊だと思う。僕たちのホームステイした村には、村落開発普及員という職種で河添さんという隊員がいらっした。河添さんは、サラワク州土地開発省というところに所属されていて、村の土地利用をはじめ村の発展のために大きく貢献されている。また、隣り村にも家畜飼育の仕事でサラワク州経済開発公社に所属されている、菊地さんという隊員がいらっした。菊地さんは今、養鶏プロジェクトに取り組んでおられ、僕たちもそのプロジェクトに少し参加させてもらった。二人ともこちらの人たちと話し合ったり、冗談を言ったりしてとても楽しそうだった。隊員の人たちとの懇談会もあり、他の隊員の人たちがどのような活動をしているかなど、いろいろ教えて下さった。その中の隊員の一人がこうおっしゃっていた。「僕はよく、ここに何をしにきたかと尋ねられる。僕はこう答える。僕は彼らにものを教えに来たんじゃない。彼らといっ

しょに学ぶために来たんだ。言い替えば、だれかのために生きるのではなく、だれかといっしょに生きるのだ。」僕は、これを聞いて激しく心を動かされた。これこそが本当の意味での国際貢献ではなかろうかと思った。本当に大事なことは、彼らといっしょになって考えたり、語り合ったり、泥にまみれたりして自分が成長していくことだと。そして、国と国のつき合いの原点は人と人、つまり心と心にあるのだ。人と人が本当に心を通じ合わせていなければ、真の国際平和はおとずれない。僕はそう思った。

この体験を通して、本物に触れることができたことが、僕の人生に大きなプラスとなったと思う。僕はここに将来本物の国際貢献をすることを誓い、この体験事業を終えたいと思う。



「日本」と「マレーシア」 とのちがい

三窪 絵里
(明和中学校1年)

マレーシアの教育システムは、小・中・高などがあり、その他に、職業訓練校、師範学校、工科学校、大学などがあります。そして、小学校は6年間、中学校は3年間、高校は2年間ということになっています。その中でも、わたしは、中学校のことについて、もっと、くわしく学ぼうと思い、そして、マレーシアの中学校は、日本とどのようなちがいがあるのか、を調べたいと思いました。

マレーシアの中学校は、1教科が40分授業で、授業と授業の間の休み時間がないそうです。それに、月～木曜までは1校時～10校時、金曜は8校時で土・日は休みだそ



うです。ここだけでも、日本とマレーシアの中学校のちがいがわかりますが、私はこの校時数や、休み時間がないということを知って、とてもおどろきました。次に、科目のことについては、マレー語・英語・科学・保健体育・理数・宗教などを主にやっています。そしてわたしたちの訪れた学校は中学1年生の時から、4つのコースにわかれて勉強するそうです。それぞれのコースにより地理・文学・理科・物理・化学・生物等の授業時間数が違います。その他に宗教コースでは宗教法・イスラム法・イスラム世界についてなどの授業があります。こういう宗教関係の勉強があるとは、日本では全く考えられないことです。しかし、反対に、日本とちょっと共通することがありました。それは、教科書が、日本とだいたい同じだったことです。数学の教科書を開いてみると、日本人にでもわかる問題がのっていました。こんな面でもとてもおどろきました。次に、学校のしくみについてわかったことは、1年間に2学期にわかれているということです。まず12月2日から新学期が始まります。そして5月28日におわります。理由は、雨季と重なるので、その地方の気候にあわせてあるのだそうです。そして2学期が6月22日～10月29日までだそうです。ということは、わたしたちがここの中学校に行った時は、もう、

2学期だったということです。でも、この中学校は春休みと秋休みしかないそうです。わたしたちの日本は春・夏・冬休みがあります。マレーシアの子供たちはとてもかわいそうだと、思いました。次に家での手伝いについてです。わかったことは、わたしのホームステイ先の家庭では、見ていると、なぜか、朝食や昼食、夕食を子供が作っていました。子供といっても小さい子供ではありませんが、お母さんは、全然手伝っていませんでした。それはわたしと、ホームステイ先のお母さんが、話している間に、ご飯が食卓に並べてあったからです。初め、もう前に準備してあったのかなと思ったけれど、お姉さんが、台所にいて、どうぞ食べて下さい。とすすめたので、このお姉さんたちが作ったのかなと思い、不思議に思いました。次にスポーツについてわかったことは、マレーシアの伝統的なスポーツはセパタクローという遊びです。3人が、1組になって、やる遊びで、ほとんど男子がします。この遊びで使うボールはまりみたいによくはねて、おもしろいボールです。やり方は、手以外の足や頭などを使って相手のコートに返す遊びです。村の人のセパタクローを見ていると、とても上手で、わたしたちにはマネできないような、はやさで相手コートにうちつけてとてもこわかったです。次に、学校の宿題やテストについてわかったことは、マレーシアの学校も同じように、テストは、あるそうです。しかし、マレーシアでは、試験でおちたらそこでストップ。それにお金なしではいけないそうです。それに、マレー語ができな

かったらいくら他の教科が全部Aでも次のコースには進めないそうです。それに職業系も、いけないそうです。わたしはこれでマレーシアの試験はきびしいことを知りました。次に中学校の自治会についてわかったことは、委員長が1人、副委員長が2人、そして、あとは各1人ずつ係が決まっているのだそうです。そしてここにも生徒会長、副会長がいるそうです。しかし、会長と副会長はどちらとも男子になるそうです。それに、日本とちがって、生徒たちが決めるのではなく、学校の校長先生たちが決めるそうです。その選ばれる人とは、頭がよくて、日ごろのおこないもよくて、何もかもカンペキな人になるそうです。こういう所もずいぶん日本とちがう所です。最後に、マレーシアの宗教学校は、男女別々の廊下です。こんなにもちがう所があるとは思っていませんでした。このように、マレーシアの中学校は、勉強の面でも、生徒会の面でもいろんな面で、きびしいことが分かりました。これが一番の日本とのちがいだと思います。テラガアイール村でのホームステイ期間中、マレー人はやさしい人が多く、自分の考えを持っていると思いました。しかし、どんどん機械化が進んできて、回りの人々の生活が変わってくると、この人たちの考えも変わってくると思いますが、わたしはこの人達が今と変わらないやさしさをいつまでも忘れずに持っていてくれることを願っています。又、青年海外協力隊の隊員との意見交換会で学んだことは、まず、マレーシアの国造りに必要なものは、労働力で、その為には先進国がいっしょに

なって協力して行くということです。その中での問題点は、マレーシアには、さまざまな人種がありますが、その多種多様な人々とどのように調和してやって行くかということです。それには、地域かくさや貧富の差、民族感をなくすことだと思えます。

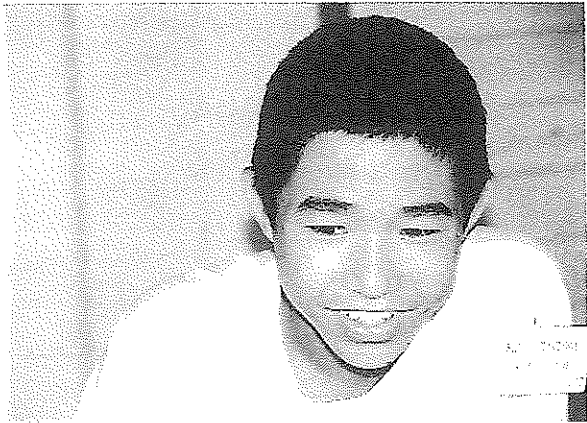
協力隊員に接して、協力隊とは、今から発展して行く国に、教えるだけではなく、共同しあって伝え、日本を知ってもらうには、現地の人々に信用してもらうということを学びました。わたしは、現地の人々にもっともっと日本のことをよく知ってもらうために努力をしたいと思えます。



「自然との共存」

上岡 正吾

(高山中学校3年)



「青少年海外協力体験事業に参加してみよう」と、僕がそう思った大きな理由は、もちろん外国に興味があった事と、それよりも青年海外協力隊、国際交流というものに、興味があり、できればそれを自分で体験してみたいと思ったからだ。

僕はそれらの事に興味があるわりには、はっきりいって、その事に対する知識というものは持っていなかった。だから、もう少し日本でその事を勉強してから行けば良かったのだけれど、結局は十分な準備もして行かなかった。しかし、今ではそのお陰で、新しい発見などをより新鮮に感じられたのかもしれないと考える様にしている。

マレーシアに着き、現地に滞在中の青年海外協力隊の隊員の人達との懇談の機会があり、彼らの話を聞いているうちに、自分の間違った考えや青年海外協力隊についてあまり理解していない多くの日本人がいるという事に気づいた。僕たちは青年海外協力隊と聞くとおおよそ、開発途上国へ行き、

そこの技術の無い人々へ先進国の人々が技術援助をするという、一方的にこちらは教えるだけの立場かと思っていた。しかし、それは誤解だった。確かに、技術指導などの面で教えたりする立場にまわる事もあるが、隊員たちは教えたりするばかりではなく、現地の人々と共に生活し、色々な事を理解し、学ぶことも実に多いという事だった。現地の人々が望むだけの知識をあたえ、共に悩み、そして、学ぶという、難しい、しかし、やりがいのある仕事だと思った。

僕は1週間、マレーシアという、開発途上国ながら、目覚ましい発展をとげている国に滞在し、たった1週間でも、驚きや新発見の連続だった。例えばこの国は、多くの違った民族の国家だということも実感できた。やはりその中でもマレー人にとっては、イスラムの教えは広く人々に伝わっている様だった。今では地球上の5人に1人はイスラム教徒だと言われる程にイスラム教は世界に広まっていると聞いた事がある。キリスト教徒より多いというのはすこし以外だった。ただ1つ残念な事は、イスラム教の事について詳しく調べられなかった事だった。

僕がマレーシアに1週間滞在した中で特に強く感じた事は、マレーシアという国自体の事だった。僕はマレーシアに対しての第一印象は、何かみんなとても急いでいる

という様な印象を受けた。それは何か、戦後の日本に似ているんじゃないかと考えた。戦後日本は荒れた経済を立て直し、先進国へ、追いつけ追いこせということで高度経済成長政策というのをとったと聞いている。そのため、日本は目覚ましいばかりの工業発展をとげ、見事先進国への仲間入りをした。しかし、そのために失ってしまった物も少なくはなかったと思う。山では多くの木を切り、海では港をつくるために海を掘り、または埋め立て、空はスモッグに汚れるなど、まるで自然との共存を拒絶したかのような生活など、多くの物を犠牲にして今の日本は成り立っていると思う。都会では、他人に対する優しささえも無くしてしまっている人も多いと思う。

今、マレーシアは昔の日本の発展のころと似た様な状況にあるような気がする。今マレーシアでは、年間すさまじい数の木が切られている。それは、国の経済発展のうえでしかたのないことなのかもしれない。けれども今、世界のみんなは気づき始めていると思う。自然の大切さを、それをなくしたら取り返しのつかないという事にも、だからこそ、これからは、人間の技術でもって、自然と共に生きて行く事が大切なんだと思う。僕は自分の国は、先進国と呼ばれている国の仲間入りをし、ずいぶん勝手な事ばかり言うようだけれど、もっと自

然との調和のとれた生活をしていかなければいけないと思う。

マレーシアは今、すさまじいスピードで発展しているが、そんなに急ぐ事もないと思う。もし困った時には、世界中で助け合っていけばいいと思う。世界中の人間が同じレベルで物を見ていくという事は不可能くらい難しい事かもしれないけれど、それがもしできたとしたら、世界中の国々はさらに上の段階へ進めるんじゃないかと思った。それを成しとげていくのはだれでもない、今ここにいる僕たちだという事も感じた。



「ともに生きる」こと の大切さ

福永 葵

(錦江湾高等学校1年)



マレーシアでの8日間を振り返ってみる
ときに、7月24日の夕方に行われた協力隊
員との懇談会の席で、隊員の方が、「教え
てあげるといふ気持ちで接しても、その
人は心を開いてくれない。」と話してくだ
さったことが印象深い。

初めに、テラガアイール村の人々、特に
ホームステイ先の家族が、私を心から歓迎
してくださっていたことを感じた喜びにつ
いて述べてみる。

テラガアイール村に到着した夜は、村の
集会所で、大歓迎を受けた。その後、ホー
ムステイ先のお母さんと荷物を持ってくれ
たりした男の子数人に連れられ、家に案内
された。板のドアを開けて入ると、お父さ
んの他にもお姉さんも待っていてくれた。

簡単な自己紹介をした後、すごく甘い
コーヒーと紅茶の接待を受けた。私は、
「この人たちは、よく、こんな甘いもの
が飲めるな。」と思うくらい甘い飲物だっ
た。翌日、このことを、同行者の宮菌さん

に話したところ、「それは、お客さんとし
て歓迎されているからだよ。」と教えてい
ただいた。

昨夜のことを思い起こしてみると、私だ
けがコーヒーや紅茶をいただいていたこと
からしても、甘さは歓迎の心を表していた
ことが分かった。鹿児島に帰ってきて、父
に話してみたら、「20年くらい前までは、
大切なお客様には「砂糖茶」を出していた
んだよ。」と言われた。大切な物を大切な
人に心を添えて差し出すことを学んだ。そ
して、日本とマレーシアとの共通点があっ
たのが、うれしかった。

また、土地開発省主催の晩餐会が行われ
た日は、ステイ先への帰宅が深夜の12時近
くになった。家は、玄関先に深い溝があり、
そこには板が渡されていたので、「真っ暗
な中、あの細い板をどうやって渡ろう。」
と、心配しながら家路に就いた。

玄関の周りには、電球が10個ほど灯して
あり、安心して板を渡れた。家の中に入
ると、家族全員が起きていて、紅茶を出し
てくださった。私が、「寝たい」と言ったら、
みんなが寝室に引き上げた。「帰宅するま
で、とにかく待っていてくださったのだ。」
ということが分かり、その気持ちがうれし
かった。家族の一員としての実感が残った。

家には、毎晩、親戚や近所の人々が集ま
り、私を歓迎してくれた。私が「寝たい」

と言うまで楽しく集っていた。

地域の方々が私達を温かく受け入れてくださっていることは、楽しそうな表情などから感じとれた。言葉はなかなか通じなくても、気持ちは分かり合えることが素晴らしかった。お互い自分の気持ちを素直に表現し合うことが大切であると思った。

次に、民族衣装を着せてもらって交流を通して感じたり考えたりしたことを述べてみる。

家に滞在して2日目からは、昼間の活動から帰ってくると、着替えにマレーシアの民族衣装を準備してくださっていた。それを着て夜を過ごす時、周りの人と同じ物を着ていることで、私も仲間に入れたような気がして、とてもうれしかった。

翌日の夜、お姉さんが「キモノ」と言った。私は、どう説明してよいか分からなかったもので、トランクに入れておいた「浴衣」を取り出してみると、「着てみて」と言われた。浴衣姿になった私と家族全員が記念写真を撮ることになった。

そして、「私も着てみたい。」とお姉さんに言われたので、着せてあげた。うまく着付けを手伝えたのでうれしかった。それからは、お姉さんと一層親しくなった。

私は、「何事も、きっかけなんだな。」と思った。と、同時に、初めて家族からお願いされたので、私のことを他の家族と同じように、考えていると思えて、うれしかった。

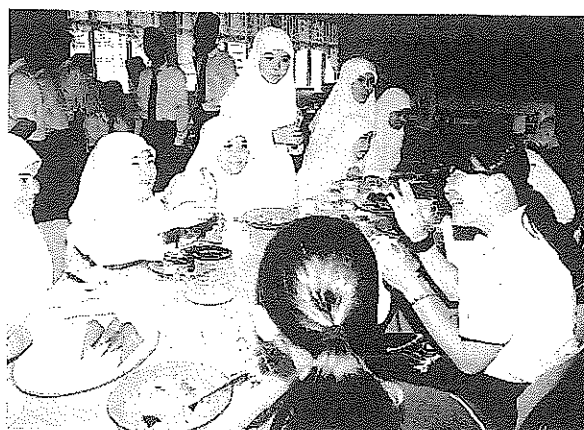
ホームステイも終わりに近づいた日の夕食、いつも私には、スプーンとフォークが出されていたので、それを使って食事をしていたら、お母さんが、ジェスチャーで、

「右手で食べてみなさい。」と言ったので、そうしてみたら、みんなが喜んでくれた。

「手で食べてよかった。」と、つくづく思うことであった。そして、「きっと、家族の人も、私が打ち解けるのを待ちに待っていてくださったに違いない。」ことが分かった。

私は、お互いの生活習慣を大切にすることが、お互いの文化を尊重することの出発点であると考えた。そして、私と家族は、お互いの文化の出発点を、進んでいると思った。そして、私は、マレーシアの文化を忘れまいと思った。

私は今まで「国際協力」とは、技術の発達した国が、開発途上の国に、自分たちの進んだ技術だけを教えてあげるものだと思っていた。しかし、本当の「国際協力」とは、「教えてあげる」という気持ちではなく、「自分も学ぶ」という気持ち、つまり無理やり自分達の技術を伝えるのではなく、現地の人々が今、本当に必要としていることを、一緒に考え、知恵を出し合いながら、解決していくことだと考えるようになった。こう考えるようになったのも、今年の夏に、マレーシアに行くことができたからだ。



教えながら学ぶ

加藤 剣竜

(志布志高等学校1年)

僕は以前から青年海外協力隊についてとても興味を持っていた。でも実際には、どのような活動を行っているのか、まったく知らなかった。この青少年海外協力体験事業に参加することが決まったときには、とても嬉しかった。協力隊の活動を自分の目で見たり、実際に体験して、日本では学べないものをたくさん吸収してこようと決意し、マレーシアへ飛び立った。

飛行機で6時間かかってクアラルンプールの空港に着いた時、自分が想像したほど暑くはなく、マレーシアへ来たという実感がまったくわいてこなかった。でも翌日地平線まで広がる、熱帯雨林特有の密林を見

た時には、あまりにも密林の広さに驚き、

「ここは日本ではなく、マレーシアなんだ。」

と改めて実感した。

でも広大でとてもきれいなこの密林地帯は村の開拓や日本をはじめとする諸外国へ木材などの輸出のために伐採が進んでいると聞く。僕たちがホームステイをするサラワク州でもこの問題をかかえていた。

マレーシアは、2020年までに開発途上国をぬけだして、先進国への仲間入りを果たそうとする政策を掲げている。そのためには、どうしても密林地帯を開拓しないといけなくなる。僕たちがホームステイしたテラガアイール村でも、エビの養殖場を作るために広い範囲でマングローブを伐採する計画が進められているそうだ。僕は、マングローブがあまりにも美しかったので伐採してほしくなかったが、村の人達のことをいろんな面から考えてみると、自分個人だけの勝手な意見だけで、一方的に反対だと言っただけではいけないと思った。

マレーシアでは、JICAや青年海外協力隊などがいろんなプロジェクトを行っている。その中で、僕達はJICAが行っている救急医療プロジェクトを見学したり、サラワク州経済開発公社が行っている畜産プロジェクトの養鶏作業を体験することができた。



養鶏場での作業は、高床式の建物で飼っている鶏に、飼料や飲み水の入れかえをすることだった。日本の養鶏は、鶏1羽を囲いで囲むやり方だけれど、マレーシアの養鶏は、建物の中にたくさんの鶏を放し飼いにするやり方だった。高床式だったので風通しは良かったが、あの養鶏場特有の鼻をつくようなにおいは、たまらなかった。

救急医療プロジェクトは、テラガアイール村から車で40分ぐらい走ったクチンのサラワク総合病院で行っていた。この病院は、サラワク州政府が直接管理しているだけあって、日本の大きな病院と同じくらい設備が整っていた。とても開発途上国の病院とは思えなかった。でも地方では医者が少なく、この病院のように設備の整った病院もなく、病気やケガをした人で治療をろくに受けられない人がたくさんいると聞いた。だからプロジェクトを行っていく上でこれからの課題は、若い医者を設備の整ったこの病院で多く経験をつませ、そして優秀な医療スタッフを増やしていき、サラワク州全体の医療技術を上げていくことだとスタッフの一人が話して下さった。

また『本当の意味での国際協力』という話も伺った。最近、マスコミで国際協力とよくさわがれるようになってきている。だからJICAや協力隊の人達は、活動を行う場に行くと、現地の人々に強力な技術スタッフとして心から歓迎されるものだと思っていた。でもそれは自分の間違っただけの思い込みでしかなく、

「お前は、いったい何をしに来たんだ。」と、言われて冷たい目で見られることもあ

ると隊員の一人がおっしゃった。この話は、本当なのかと一瞬疑ってしまった。ただ技術だけを伝えても、現地の人からはほとんど理解してもらえないので、現地の人と同じ土俵に立ち、現地の人からいろんなことを教えてもらうことが大切だ。そしてお互いに学び合いながら現地の人が本当に望んでいることを、日本の技術で補うことが本当の意味での国際協力だと話して下さった。JICAや協力隊というものは、とても地味で、大変な仕事だと思った。でもこれほど大変な仕事を一生懸命やっている方々を目にすると、とてもやりがいのある仕事をしているのだなあと、考えた。勉強もあまりせず、ただ毎日をのらりくらりと過ごしている僕は、協力隊の方々ととてもうらやましく思え、素晴らしい人達だと思った。

協力隊員の一人が、

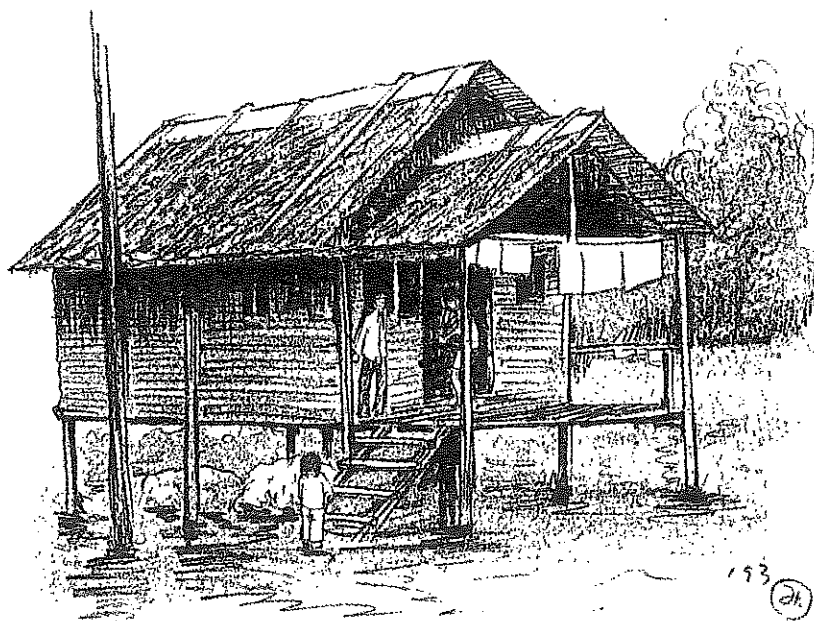
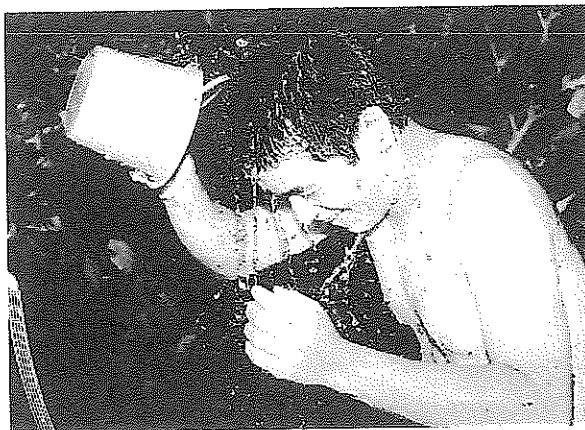
「教えることより学ぶことの方が多い。」と、おっしゃった言葉が、とても印象的だった。

村でのホームステイ中は、僕にとって初めての体験ばかりだった。言葉がまったく通じない家族に囲まれて、ホームステイ初日は、何を話せばよいのか、何をすればよいのか、とまどったけれど2日目からは身ぶり手ぶりの少し奇妙な会話でコミュニケーションをはかることができた。

また地元の小学校や中学校を訪れた時にも、すぐ友達ができて、文通をすることになった。見知らぬ人とこれほど親しくなったのは、初めての事だった。僕自身の性格がこんなのにのりやすいタイプだったのかと、新しい発見をしてしまった。

この青少年海外協力体験事業は、たったの1週間だったけれど、これほど中身の濃い1週間は今までにはなかったと思う。それまでの僕は毎日を怠けてすごしていたと、改めて感じさせられた。

僕はこの体験を通して、協力隊員と同じくらい、やりがいのある仕事に将来就きたいと強く感じた。それはエンジニアになることだ。その為には、今をしっかりとやっ
て行かなくてはならない。そして、いつの日か、協力隊員となれる様、頑張っていきたい。



村人に接して

福川 真理子

(加世田女子高等学校2年)



今回の体験事業に参加できたことは、私にとって、たいへんな幸運でした。

参加できると決まったとき、まず考えたのは、“マレーシアとはどんな国なんだろう”ということでした。

地図での位置は、知っていたのですが、人々はどういう生活をしているのかとか、食事の方法とか、何も知らなかったのです。

そこで、いろいろ資料をそろえてみて、私なりに調べてみたりしました。

中進国になりつつある開発途上国というのがマレーシアの説明の中にありました。

開発途上国という言葉から私が連想したのは、電気も、水道も通っていない生活でした。

すごく不安になったりもしたのですが、逆にキャンプみたいで楽しそうだと思ってみたりもしました。

私は寮生活をしているということもあり、出発までの10日間くらいはとても忙しく過ぎていきました。

事前研修で、他の団員とも会ってはいるわけですが、彼らと打ち解けることができるかどうかというのも不安の一つにありました。でもあまり悩む時間も無いまま、あっという間に出発の日になりましたし、そんな不安など無用なものとなりました。

出発の日、朝早くから起き出して準備をしました。

空港での結団式では、とても緊張しました。

鹿児島から福岡までは約40分、福岡からマレーシアのクアラルンプール空港までは、約6時間です。6時間の飛行機の中というのは少し退屈でしたが、話しをしている間にあっという間にマレーシアに到着しました。

マレーシアに着いてまず驚いたのは、高層ビルがたくさんあったということです。

車の交通量もすごく多くて、クアラルンプールに着いた時点で、最初の開発途上国というイメージは消えてなくなりました。

2日目に、ホームステイをする村のあるサラワク州クチンに向かいました。

クチンもだいぶ開発されていて、やはり開発途上国というイメージはあまりうけませんでした。

暗くなりかけた頃にテラガアイル村に向かったのですが、市内から少しはずれると、すぐ外の景色は闇に包まれました。道

の両側が、建物から木々へと変わったのです。

村に着くと、とても盛大な歓迎をしてくれました。私はそのあまりの盛大さに、この歓迎に自分が値するのかと不安になりました。

歓迎式では、まずステイ先の家族との対面と、マレイシアネームをもらうというのがありました。私のマレイシアネームはZALEHA（ザレハ）でした。この名前は、今でも結構気に入っています。ステイ先の家族の人はとても優しい笑顔で迎えてくれました。言葉が通じるかどうかとても不安だったのですが、その笑顔が見れたことで少し不安が薄れました。

3日目は、まず養鶏プロジェクトの体験でした。初めて養鶏場を見たのですが、同じような鶏がたくさん居るのを見るのは少し怖い気がしました。いろいろ体験してみたかったのですが、何と言ったら良いのか解からず、あまりたくさんのことはできなかったのが残念です。やはり、言葉は、しっかり勉強しないといけないと思いました。

この日の午後からは、テラガアイール村内の小学校に行きました。植樹をしたり、小学生を交えてのゲームをしたりして、とても楽しい時間を過ごすことができました。

4日目、まず村内自治会による村内活動紹介でした。テラガアイール村は、サラワク州の中で開発のモデルになっている11の村の中の一つでした。

現在、水道は村の90%ぐらいに、電気は去年の8月に通り、村のほとんどに普及し

ているとのことでした。現在計画中のプロジェクトもいくつかあり、これからどんどん発展していきそうな村でした。

午後からは、村から少し離れたところにある中学校へ行きました。

イスラム教の学校で、男の子は女の子に、女の子は男の子に触れようとせず、握手もできなかったのには驚きました。

この学校では、生徒と話をすることができました。

始めは静かだったのですが、少し慣れてくると、次々に質問が出てきて、答えるのに一生懸命で、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

5日目、JICAのプロジェクトを見学しました。救急病院で、サラワク州のセンター病院だということでした。すごく設備も整っていて、驚いたのですが、まだまだ無医村もあるので、その格差は大きいとのことでした。

私は今、看護科に通っていることもあり、このJICAのプロジェクトは楽しみの一つでもありました。大きな病院でもあったので充実した医療ができているのだろうと思ったのですが、やはり、医療スタッフの不足が問題になっているとのことでした。

JICAのスタッフの方のお話の中に、教えたり伝えるだけでなく、一緒に考え、作りあげていくことが大切だという言葉があり、とても共感を覚えました。

村に帰って、少しゆっくりすると、もうお別れパーティーの時間でした。

お別れパーティーでは、民族衣装とも言うべきものを着せてもらいました。

日本の歌を唄ったり、踊りを見せてもらったり、とても楽しかったです。

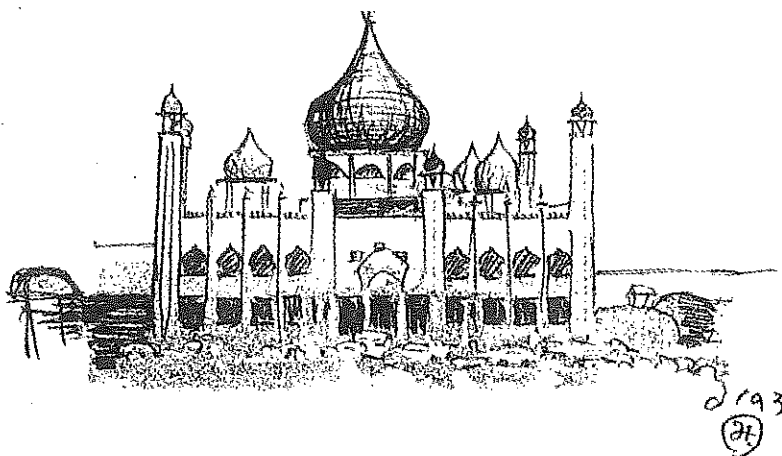
たった4泊5日のホームステイでしたが、とても楽しいでした。片言のマレーシア語を使い鹿児島や日本の生活の様子を伝えようと夜、おそくまで話していたり、浴衣を着せたり、お別れにと家族の一人一人からプレゼントをもらったりしたときには、泣いてしまいました。知らない土地で、言葉も満足に通じない所に一人でホームステイというのはとても不安でしたが、言葉が上手く通じないぶん一生懸命に接してくれて、それがこちらに伝わってきて、とてもうれしかったです。

この体験事業で私は、少しだけでも現地の人との心の交流ができたと思います。

もっと多くの国を知りたいとも思いました。まだまだ私の知らない国はたくさんあります。その多くの国々の中の一つを見たにすぎないけれど、私にとってすごく良い

経験になりました。

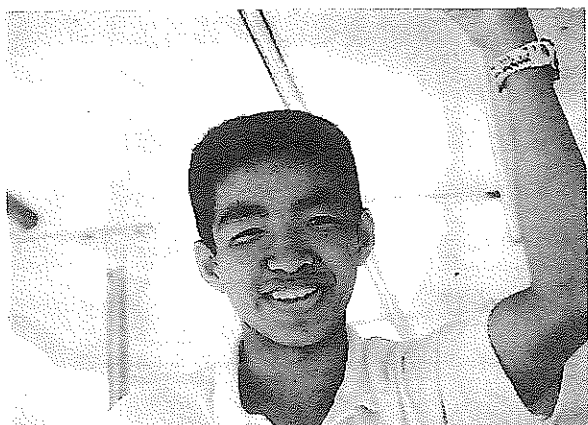
これから、看護婦になったときも、言葉だけにたよらず、心からの交流を心がけるようにしていきたいです。看護を学んでいる私は、まだまだ勉強不足ですが、あらゆる努力をして目標を達成しようと思っています。そして看護婦として日本国内だけでなく、将来は協力隊員として任地へ赴任し、専門的な知識と語学力を身につけ、看護を通し、共に学び、共に造り出して行くと言う人と人との心と心の交流を推し進めたいと思っています。



ホームステイと協力隊

三島 隆志

(鹿児島中央高等学校1年)



僕は、この体験事業に参加するまで青年海外協力隊というものをよく知らず、どういことをしているのかと聞かれても、開発途上国へ行きその国の発展に力を借すというふうにはしか答えられなかったと思う。そして協力隊の人はどうしてわざわざ他人のために働くのか不思議だった。しかし、この体験事業に参加したことによって、僕は青年海外協力隊に興味をもち、僕自身も将来は、青年海外協力隊に入隊したいと思うまでになっていた。

なぜ自分の考え方がこういうふうに変ったのかは青年海外協力隊として派遣中の隊員との会話で、みんなそれぞれ自分の仕事に誇りをもっているということを知り、自分も大人になり誇れることを1つでもやりたいということもあったが大きな要因はテラガアイール村でのたった4日という短いホームステイの中でふれあった人々の優しさだった。

僕は今まで開発途上国をなんとなく馬鹿

にしている所があった。そんな僕をテラガアイール村では歓迎してくれた。

歓迎式の最中僕は「IDRIS」というマレーシアネームをもらった。これは僕がテラガアイール村でホームステイするための名前だった。僕がこの名前をもらおうと、大勢の村人の中から民族衣装を着た優しそうなおばさんが僕の前まで歩み寄って来た。言うまでもなくその人が僕が4日間お世話になるホームステイ先のイブ、日本でいうお母さんであった。

僕達の歓迎式が終わるとイブは自分の子供に僕の荷物を持たせて家へ向かった。帰り道、僕はかばんを持ってくれた男の子に「てれながら」マレー語で「テレマカシ」（ありがとう）と言うと男の子は笑いながら「どういたしまして」と言った。ぎこちない日本語ではあったが僕はみょうにうれしくなり、この男の子と話がしたいと思った。

しかし、次の言葉が浮かぶ前に家についてしまった。ついた家は、コンクリートで四角に塗り固められた物にドアと窓がついているような感じだった。しかし、この家も村も僕の想像していたものにほど遠かった。僕の想像していた村にはガスはもちろんのこと電気もなく、家もロングハウスが立ち並んでいて夜にもなると虫が寄って来るはずだったのに、実際はガスも電気もあり家

によってはテレビやカセットデッキまでもあった。

ところで、僕は、ホームステイするにあたって言葉についてはもちろんのこと、何を話せばいいのか話題についても心配だったが、この四日間はいろいろなことがあった。

たとえば、日本から持って行ったみやげを渡すと、その中の風鈴を珍しそうに見ていた。そこで僕は、風鈴の説明をするのだが、自分の知っている単語ではどうしようもなく、身ぶり手ぶりの説明で2時間かけて理解してもらったり、夜、突然マレイシアの民族衣装を着せられ、散歩しながら村の中を説明してもらったこともあった。夜9時ごろだったというのに、道にはたくさんの人がいて、屋台などもでていた。川にも連れていってもらったが、大きな川で兩岸にびっしり生えたマングローブがとてもきれいだった。そんなマングローブの森林をみていると地球の自然が減り続けているなんてことが信じられなかったと同時にこういう森林はいつまでも残していくべきだと思った。

その他、食事をするにしてもいろいろなことがあった。マレイシアの人々は箸を使わず手で御飯を食べるので僕も挑戦してみたが、ごはんは熱いし、指の間からはこぼれるし、1人で悪戦苦闘していると横でいっしょに御飯を食べていたホームステイ先の兄さんが僕に御飯を固め下からすくい上げるようにして御飯を取るやり方をやってみせてくれた。僕もそのとうりにやってみたがうまくいかずまわりの人は、そんな

僕を見て大笑いしながら何か楽しそうに話していた。そういう時、僕も言葉が理解できれば会話に参加できるのにといい、言葉の大切さを思い知らされた。

そんなふうにテラガアイール村でホームステイする間、僕達は青年海外協力隊の仕事を体験、見学したりした。セーラン村での養鶏プロジェクト、JICA医療プロジェクトの見学、それらを通して思ったことは、日本人というのは、指導的立場に立ち派遣先の人々に命令するというのではなく派遣先の人々と協力し、お互いの意見を尊重しながら仕事を進めているということだった。そのため派遣中の隊員も自分が派遣先の人々に教えられることもあるそうだ。

その他に僕たちは、マレイシアの中学校を見学したり、村内自治会役員との意見交換会に出席した。村内自治会は、日本の地方公共団体のような物で、村内自治会には農協、漁協や青年団や婦人会をはじめとする15の部門があるという話だった。僕は、この村内自治会との意見交換によりテラガアイール村がなぜこんなに開けているのかということを知った。この村は、いろいろな面での実験的な村としてサラワク州政府から援助を受けて村の開発をおこなっているため、電気もガスもあるのだという話だった。

今、マレイシアは、2020年までに先進国の仲間入りをしようと必至になっている。確かに、マレイシアが今のままの経済的成長をすれば先進国の仲間入りもそう遠いことではないと思う。しかし、かつての日本がそうであったように経済的な物ばかりを

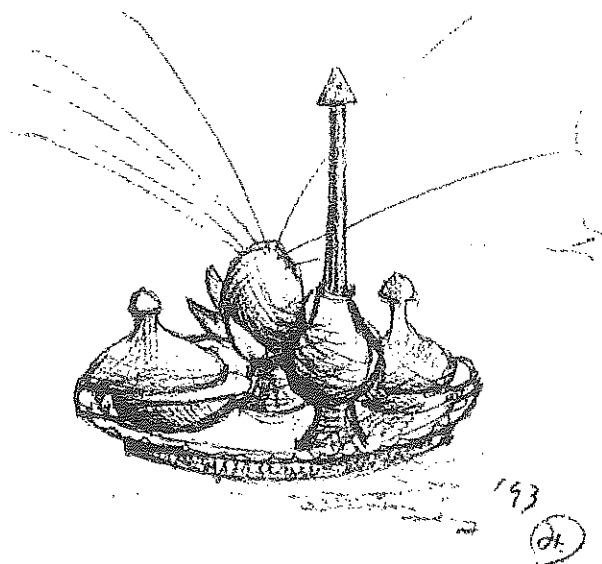
追求すれば、公害などもおこるし、人間のゆとりがなくなり優しさを失ってしまう。そういう国をつくらぬよう協力するのも青年海外協力隊の仕事だと僕は思うし、これからの日本は、経済的な面での国際協力をもっともっと要求されるようになるだろう。けれども経済的な国際協力が大きくなれば大きくなるほど日本をよく思わない人も増えるだろう。

そうならないためには、経済的な援助を増やすことも必要だが青年海外協力隊のよ
うに現地の人々と直接ふれあい、協力しな
がら仕事を出来る人々が必要不可欠だと思
う。

しかし、いつかは、青年海外協力隊を必要とする国がなくなるだろう。僕は、それが良いとも悪いともいえない。他の国の力を借りなくてもよいということは、多くの国は、もう自分の国だけで立派にやれるということだが、それと同時にそれらの国々

は軍事面でも一人立ちできるぐらいになっているだろう。そうなった時、青年海外協力隊は、青年文化交流隊とでも名前を変えて、国と国との文化を互いに理解し国交を深めることで戦争を最小限におさえることができるだろう。

とにかく僕は将来、青年海外協力隊に入隊し、たくさんの人々と出会い、その人々と協力しながら仕事を進める予定だが、もし協力隊に参加出来なかったとしても、僕はなんらかの形で世界に役立つことをできればと思う。



「心の優しさ」にふれて

濱田 孝子

(日当山中学校3年)



「マカン (食べる), ミヌン (飲む), マンディ (水浴び)。」この言葉は私の中で、マレーシア三大語として強く残っている。これは、4泊5日のホームステイ先で目が合う度に言われた言葉だ。ホームステイ中は、食べるものは辛く、飲むものはとても甘く、水浴びの水はとても冷たくて、すぐに慣れるものではなかった。

マレーシアの気候は、熱帯であり、日中33度から36度もある。日本人である私にとっては、たまらない猛暑であった。しかし、夜になると急に温度は下がり、暑さもあまり感じなくなった。熱帯のもう一つの特徴は、多雨であるということだ。2日に1度は、ものすごい雨が降った。ホームステイ先の屋根はトタン屋根で、雨が降ると、大声でしゃべらなければ聞こえないくらいに、雨音はうるさかった。

クチンの青空市場では、日本ではあまり目にしない光景を見ることができた。数多くの野菜や果物、服など日用品までもが広

く売り出されていた。珍しい果物や、日本では、高価なものが安価で売り出されていて、驚くことばかりであった。市場で私は、ドリアンを生まれて初めて食べてみたが、においも味も、バナナの腐ったような感じで、二度と食べたくないと思った。又、こういう売場で品物を買う時は、必ず、値切らなければならないそうだ。まずは、売り値の半分以下に下げうまくやりとりするそうだが、私は、マンディで使うサロンを買う時に、値切りに失敗してしまったが、このようなことは、日本では見られないので、とても楽しかった。しかし、マレーシア語での値切りは難しく、他の人のやりとりを見ていると、けんかをしているようでこわかった。

7月24日の歓迎式では、村人達は、夜遅くにもかかわらず私達を盛大に迎えてくださった。全く分からない言葉で着々と歓迎式は進められ、しばらくすると、お祈りが始まった。手のひらとおでこに白い液を付け、香水を手のひらにたらし、お茶の葉のようなものを全員にふりかけ、これは、この5日間、無事で困ったことがないようにというおまじないだそうだが、実際に、困ったことはたくさんあった。その後、私達はそれぞれ、マレーシアネームをもらい、私は、SUMIYATI (スミヤティ) と名付けられた。どこかの偉い方の奥さんの名前だ

そうだ。それと同時にホストファミリーとの顔合わせがあった。今日から5日間も皆とはなればなれで、知らない人の家にたった一人で泊まるのだと思うと、とても不安だった。ホームステイ先では、全々と言って良い程、言葉は通じず家族の人が笑うだけで、自分のことが笑われているような気がして、早く5日間が過ぎないかなあと思っていた。マンディでは、浴槽が無く、ひしゃくを使って体に水を流し、そして、体は、タオルでこすらず、手に石けんをつけてこするので、あまり気持ちの良いものではなかった。大変苦労したものは、水とトイレである。日本のように、水道はあっても、一回煮沸させなければ飲むことはできない。煮沸した水 (masak air) を下さいと言っても、赤や黄色の粉末ジュースを出され、ますますのどが渇き、とても困った。そしてトイレは、紙を使わず、左手で始末をし、水で洗い流すというもので、不快感があったので、ホームステイ先でトイレを使うことはなかったが、現地の人、何ともないのが不思議でたまらなかった。御飯を手で食べるということも、私にとっては、けっこう不便であった。不浄の手とされる左手は使わず、指先でつまんで食べるのだが、ポロポロ落ちて面倒だった。又、マレイシアには、「いただきます」や「ごちそうさま」がないようで、勝手に食べ始めるので、戸惑うこともあった。ホームステイも4日目になると、だいぶ慣れてきた。いつの間にか、もっといたいなと思うようになってきたのは、確かである。なぜなら、私は今まで、分からないことがあると、

すぐにあきらめがちだった。しかし、現地の方は、勉強不足の私のマレイシア語でも、辛抱強く一生懸命に分かろうと聞いてくれたり、ジェスチャーで説明してくれたりして、なんとかお互いを理解しようとしてくれたからだ。現地の人と接することで、そのようなことや、本当に感謝することなどを改めて考え直させられ、このような良さをもっと知りたいとか、まだ別れるのは惜しいと強く心に思った。

ところで、私達日本人は、便利さを良いことに機械に大いに頼っている。これが良いのか悪いのかは分からないが、ホームステイ先には、洗濯機や電話など、日本の家庭にあっては当然のものが無かった。しかし、5日間見てきて、不便そうだとかいう感想は持たなかった。なぜなら、村の皆がとても落ち着いていて、ゆとりのある暮らしをしている様に見えたからだ。又、村の人の名前を挙げると、誰もが知っているというように、驚くほど付き合いが良いのに感心した。洗濯機などは、時間に追われる国では、絶対に欠かすことができないけれど、この村で、あたりまえのように洗濯機を使うようになったらどうだろう。今まで家族全員でしていた仕事が一人でできるようになったとしても、それによって家族のコミュニケーションが壊されるのならば必要ないと思った。家にあるものと言えば、水道、電気、トイレ、テレビ、ラジオである。ラジオは、イスラム教の人にとって必需品だと思った。私のホームステイ先の家では、朝、ボリュームを大にしてラジオを流していたので、いつもその音で目が覚め

た。イスラムのお祈りが流れているのである。イスラム教の人は、1日5回、決まった時間にお祈りをするそうだ。日本人は、宗教信仰は、自由である。又、私は、宗教に対して、こだわっていないので、宗教に無関心でもあった。しかし、マレーシアでは、街にもイスラムの寺院が目立った。イスラムを信仰する人との暮らしを体験し、宗教がどのくらいの存在であるのか、世界三大宗教の一つであるイスラム教の大きな力を感じとることができた。

中学校では、日本との違いをはっきりと見ることができた。この中学校は、イスラムの宗教色が強く、一番驚いたことは、異性どうしで触れてはならないということで、教室も座席が男女分かれていた。授業は、月曜日から木曜日まで、十時間授業であった。4時間続けて授業をし、休み時間を30分から40分とり、そして8時間目が終わったら、お祈りという具合なので、私達が、この学校で勉強するとなると、きつくてたまらないごとであろう。そして生徒会長は、学校の先生によって選ばれ、男子生徒であり、頭が良く人間的に優れている人になるそうだ。短い時間ではあったが、生徒達とも仲良くなれ、彼らは簡単な日本語や、その発音をととても知りたがった。近い年齢ほど、コミュニケーションがとりやすいと、強く感じた。

JICA医療プロジェクトでは、クチン市内で一番規模の大きな病院を見に行った。そして、この病院は、サラワクの人、みんなが利用する病院であり、ベッド数736床というとても大きな病院だった。そこは、

総合病院であり、歯科や眼科、整形外科、内科など、さまざまあった。中でも多くのリハビリ施設のそろっていることに驚かされたが、中には部屋が足りずにベッドが廊下に置いてあるところも見られた。又、お金が足りず、決まった数しか買うことのできない医療器具や薬は、同じ病気でも治る可能性の高い患者に使うなど、日本から見ると、残酷で厳しい面もあった。そして今では、ウイルスの病気も増えてきているそうだが、それをまじないなどの伝統医療で治ると信じている人も多いが、まじないだけで病気を治すというのは、不可能なことであると思う。そこで、近代医療と伝統医療との使い分けをうまくすることが必要であり、又、伝統医療も残していかなければならないと思った。

マレーシアは、木材や天然ゴムで有名な国である。ボートに乗った時には、河口に生える、マングローブがとてもきれいだった。マングローブは、今では、伐採禁止となっているそうだが、私達にとっては珍しく、あのようなきれいなマングローブは熱帯の方でしか見ることのできないものだから、いつまでも残してほしいと思った。ゴム園を見学したことは、とても心に残っている。周りには、ゴムの木がたくさん広がっていて、広さをまともに感じた。ゴムの木には、斜めに溝があり、傷を付けると、白い液がしみでてきた。その溝を伝わせて器にゴムを採集するようだ。日本に一つもないゴムの木を、自分の目で見ることができて本当に嬉しかった。

今、マレーシアは、2020年までに先進国

の仲間になろうと発展中だが、先進国と言われる日本のようになると思うと少し残念だ。豊かになりたいと思うのは当然だが、今の日本のように、近所の人の名前も顔もピンとこない先進国より、マレーシアのように、まだ先進国ではないけれど、人とのかかわりを大切にする国の方が、よっぽど素敵だと思う。片手にぎっしりと書類の入ったバッグ、もう片方の手には携帯電話を持ち、時間に追われて働くサラリーマンを、マレーシアに見たくないと思う。開発されて行くのは、仕方がないことかもしれないが、2020年に、もし彼らと会った時に

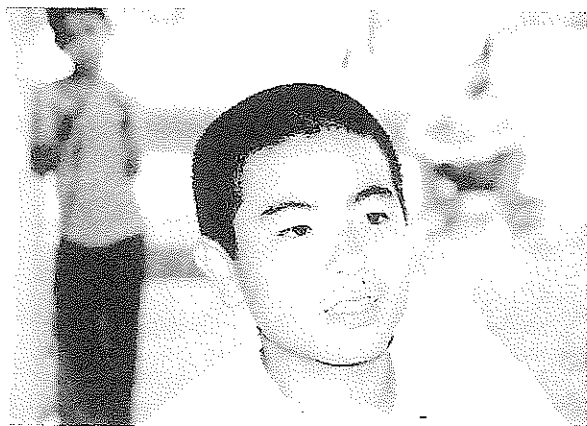
も、今と変わらない心の優しい人のままでいてほしいと思う。物の豊かさだけが人の幸せでないことを強く感じた1週間であった。



真のボランティア精神

安慶名 龍巳

(片泊中学校2年)



「龍巳，マレーシアに行ってみないか。」

ある日，学校の先生からかけられたこの言葉が，今回の体験事業に参加するきっかけとなった。新聞の記事を読まれた先生が，青少年海外協力体験事業について話してくれたのだ。

普段から自分なりに，ボランティア活動に取り組んでいた僕は，海外でのボランティア活動をぜひ自分の目で見学してみたいと思い，さっそく応募した。

待ちにまった合格通知が届いた。もちろん，僕自身もうれしかったが，それ以上に，家族や学校の先生方，そして地域の人々までもが喜んでくれた。みんなの期待にこたえるためにも，現地でできる限りの勉強をしてこよう，と決意した。

7月中旬に行われた事前研修では，マレーシア語，生活，気候などについて学習し，団員どうしの親ぼくも深め，準備万端，あとは出発の日を待つだけとなった。

7月23日，鹿児島空港での結団式を終え

た僕達は，飛行機に乗り込み，夕方にはクアラ Lumpur に到着した。

2日目にクチンへ移動し，サラワク博物館やクチン市内の見学をして夕食をすませたあと，現地で活躍している青年海外協力隊の隊員の方々と懇談会を開いた。その時，隊員の方の一人が，

「私達は，何かをしてあげるという気持ちではなく，させてもらっているという気持ちで様々な活動に取り組んでいるのです。」

というような事を話してくださった。その言葉を聞いて，「この気持ちがボランティアの精神なんだなぁ。こんな気持ちを持つことがボランティア活動の第一歩なのではないだろうか。」と僕は思った。

懇談会が終わったあと，ホームステイ先のテラガアイール村へ移動した。バスが，村の中心あたりにさしかかった時，今まで聞いた事がない音楽とともに，村民の大歓迎を受けた。歓迎式では何と言っているのかはわからなかったが，心と心で通じ合えたような気がして，とてもうれしかった。ホストファミリーにもあたたかく迎えられ，その夜はぐっすりと休む事ができた。

3日目から，いよいよ本格的な体験活動と見学が始まった。

体験活動としては，セーラン村の養鶏プロジェクトを訪れ，ニワトリのひなに飼料や栄養剤を与える手伝いをしたり，小学校

と村の川の近くで記念植樹を行ったりした。

見学としては、現地の小学校と中学校、それにJICAプロジェクトの一つである救急病院を見る事ができた。また、テラガアイール村の開発状況について、現地の方々の説明をうけることもできた。

体験活動や見学をすればするほど、隊員の方々の努力と苦勞、そしてボランティア精神に頭が下がる思いがした。僕も、これまでそれなりにボランティア活動に取り組んできたつもりだったが、視野のせまさと努力不足を改めて感じさせられ、はずかしいような気持ちにさえなった。

テラガアイール村での日程をすべて終了した5日目の夜、村の人々とお別れパーティーが行われた。記念品交換のあと、歌や踊りなどを出し合い、おおいに楽しんだ。短い期間であったが、ホストファミリーをはじめとする現地の人々と、心に残る深いきずなを結ぶ事ができたと思う。

今回の体験事業を通して学んだ事は、「真のボランティア精神」だった。

僕は、普段取り組んでいるボランティア活動に対して、心のどこかで「ほめられたい、認められたい」というような気持ちでのぞんでいたのかもしれない。その結果、中途半端でいいかげんな活動になっていた

のだ。これでは、本当の意味でのボランティア活動などできるはずがない。現地で協力隊員の方から聞いた「してあげているのではなく、させてもらっているのです。」という言葉が、今も僕の耳から離れない。

これからは、今回の体験事業で学んだ「真のボランティア精神」で、様々な活動に積極的に取り組んでいきたい。そして、いつの日かまた、マレーシアを訪れてみたい。



マレーシアあれこれ

● テラガイル村（私たちがホームステイした村）について

この村は全長約600mのメインストリートを中心とした人口757人、127戸の村である。この村ができる以前からこの辺りには、たいへん水量の豊かな井戸があったそうだ。この村の“テラガ”とはマレー語で“井戸”の意味で“アイール”は“水”，すなわちこの村は“井戸水”という意味。この井戸は、使われてはいないが今も村の中にある。またこの村は1979年、ジャングルを開拓してきた比較的新しい村である。この村を初めてつくった人は、私のホームステイ宅の前のおじいさんで、川の向こうの隣村から来た人であった。この村には発達した自治の仕組みがある。自治会は、村長を中心として農協、生協、青年団、婦人会、福祉、幼稚園・児童教育などの15部局がありそれぞれの部局には、顧問がついている。この村には通常、サラワク州政府からクチン郡庁を通じて年間約120,000リンギット（日本円で約5,300,000円）予算が落ちる。この予算で道路、水道、電気、小学校などをまかなっている。現在、この村では大規模な排水口の工事を行っている。また、村からの要求は、クチン郡庁へ届けられる。村では今度、公民館とサッカーグラウンドの建設を予定している。また、計画中にはあるが警察署やモスク、実験農場も建設した

いといっている。この3年間でこの村には約8,000,000リンギット（日本円で約350,000,000円）の予算が投じられている。これには、私たちはみんな驚いた。この村の村民は、自営業がほとんどである。漁をすらかたわら、漁ができない時期は店を営んだり都市へ出稼ぎにいたりする。漁業も大漁や不漁と収入が安定しないので、将来川のマングローブの密林を切り開いてエビの養殖場をつくるそうだ。しかし、マングローブの根は深いので、切って養殖場をつくっても4～5年経つと根が腐って、養殖場が酸性になってしまい、エビの養殖が不可能になってしまいかねないという問題が残る。

● 村の食生活について

① マレーシアでの食生活

マレーシアでは、水はまず1回煮沸させている。日本のように、水道から出た水を直接飲むような事はしないそうだ。

KLやクチン市内のレストランなどで何回か食事をしたが、日本のようにまず水が出てくるということは無かった。

水という意味のair（アイール）という言葉があるのだが、ただ、airとただけでは、たいていかき氷のシロップのような甘いジュースが出てきた。

水だけほしいと言うと真水が出てくるのだが、冷たいものはめったになかった。

マレーシアでは、飲み物は、熱くて、甘い物、食べ物、香辛料をきかした辛いものが多かった。

② 調理方法としては

煮る、炊く、蒸す、油で揚げる、いろいろあった。日本とあまり変わらなかった。特徴としては、やはり味つけで、御飯が日本のものよりばさばさしていてあまり味が無い為か、おかずの味が濃かったように思う。

味が薄いものでも、とうがらしのソースなどをつけて食べていた。

③ 食事の摂取の方法

右手で、手づかみで食べた。

御飯が、パサパサしているので、まとめにくく、初めのうちはとても食べにくかった。

だが、手で食べるのは家庭でだけらしく、客があつたりすると、スプーンが出てきた。スプーンを使った方が楽しそうだが、手で食べ慣れてしまうとスプーンも難しく感じた。

④ 食事の回数

1日に5回ほど食べるらしい。

朝、昼、晩の食事と、その間の間食だ。たまに夜食も出たりしたから、1日6回ぐらい食べているかもしれない。

⑤ 配膳

人数が多かったせいかもしれないが、たいてい、床にゴザを敷いてお皿を並べて食べた。

⑥ 食べる前に

右手を使って食べる為、食事の前に右手を洗う。きれいな水差しに入った水で洗う

のだが、水を飛ばさないように、洗うのはむずかしかった。食事後の汚れた右手もこれで洗う。

⑦ 飲み物

甘いものが多かった。煮沸後の真水以外は全部甘かったように思う。コーヒーもブラックは見なかった。ミロがあって、ミロにも砂糖を入れていた。コーヒーもミロもとても熱くて、すぐには飲めないようなものばかりだった。冷たい飲み物では、かき氷のシロップのような物があった。赤や黄色などあって、色によって少し味が違った。

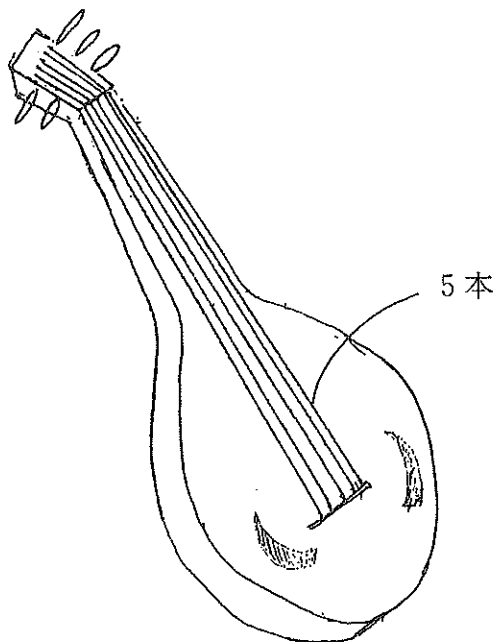
⑧ 料理

◦ Daging nasak nitam という名のビーフと、フライドポテトの料理がおいしかった。ビーフが少し甘く、あまり味の無い御飯とよく合った。

◦ Nasi Beryani は、チャーハンみたいな料理で、いろいろ混ぜてはいたのだが、味は薄味だった。

全体的にみて、料理は味が濃いものが多かったが、あまり日本と変わらず、おいしかった。だが、飲み物には、甘い物、熱い物ばかりで、少し抵抗があった。飲みたいときにすぐ水が飲める日本はいいなとつくづく感じた。

- マレーシアには、 どのような楽器があるか、
あったか

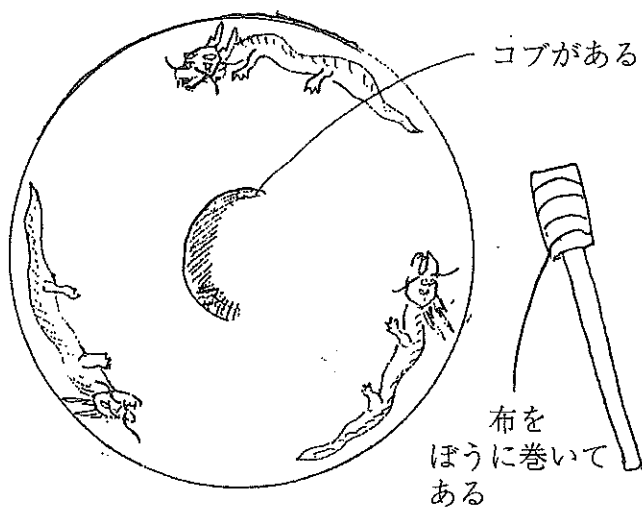
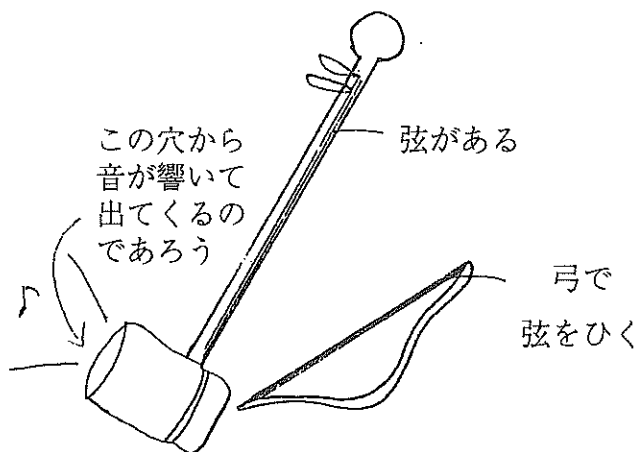


名前 ピパ

中国から伝わってきたそうだ。日本の琵琶によく形が似ている。

名前 ER HU (エフ)

形はちがうが、弓で弦をひくところが、バイオリンなどの弦楽器に似ている。

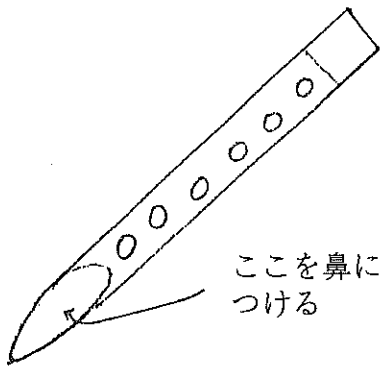


名前 ゴン

ブルネイから伝わって来たそうで、今も使われているそうだ。銅でできていて、立体的に龍がのっている。通常コブは1つだが、コブが2, 3コついているのもあるらしい。

名前 フルート (現地名不明)

竹のようなものでできている。テレビで見たが、鼻で吹いていた。悲しい、物静かな時に使うので、口で吹くより鼻で吹いた方が、雰囲気合うそう。



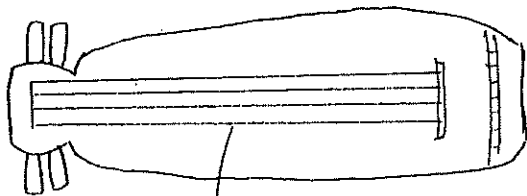
。音階やリズム感覚は日本とどこがちがうか。

音階は、西洋音階である。

ホストファミリー対面式の時のコンパン(太鼓)の演奏は、とても技術的にも素晴らしかった。やっぱり村では、近代的な楽器よりも、伝統的な楽器の方が合っていると思った。

名前 サプテ

演奏法は分からないが、琴によく似ている。



弦 (4本)

第3回体験事業を終えて

訪問団団長 弓場 秋 信

出発の朝、空港に集まった団員には事前研修時の笑顔が見えない。初めての外国、そして習慣や言葉が違うマレーシアでの生活に、一抹の不安と、これから始まる7泊8日の研修を、充実したものにするぞ！の意気込みが交差している様子である。私も初回から連続で三回目の団長であるが、回を重ねる毎に、その責任の重さが増し、新たな緊張感の中、機上の人となった。

今回の訪問地マレーシアのサラワク州にとって、日本からの中高生を中心とした公式の訪問団を受け入れるのは初めてとの事で、州政府との事前接渉は事業趣旨の説明、現地での体験内容の検討、そして派遣団17名の趣味に至るまで、連日派遣中の菊池・河添両協力隊員を介して、FAXでのやり取りが続いた。それらの通信文が一冊のファイルとして厚くなった時、全ての事前準備を終え、ホームステイ先であるテラガアイール村への到着となった。

村での活動は、村民をあげての歓迎会に始まり、小学校での「鹿児島島の森」と命名された地で、全員による果物の木の植樹、そして村民との運動会、村の自治会役員による村の開発の歴史と将来についての説明、中学校での学生との交流、村の青年とのスポーツ交流、村民総参加のお別れパーティーで終わった。その間、村の人々は言葉も満足に話せず、生活習慣も違う私共を、心からもてなし、家族の一員として扱ってくれた。又、欲張った日程にもかかわらず、当初予定された全てのプログラムを、村の自治会が一体となって、完璧にサポートしてくれ、実り多い体験とする事ができた。村人への感謝の気持ちでいっぱいである。

この事業の大きな目的の一つである協力体験活動は、菊池隊員の養鶏プロジェクトと河添隊員の村落開発プロジェクトを行なった。団員は、協力隊員が現地の人々と同じ所に住み、今、何が必要かを現地の人々と一緒に考え行動している、その地道な取組みに感銘を受けていた。又、JICAの専門家プロジェクト訪問やサラワク州に派遣中の隊員との懇親会を通して、「技術協力」の意義と協力する側の心がまえを学んだ。

不安と期待を胸に出発した団員は、毎日のプログラムを自らの勉強の場としてとらえ、未知の世界に積極的に挑戦して行きました。そんな中、団員の顔が日々輝きを増し、最後には現地の人々の生活に気遣いを見せながら、「自然と人間が共生した開発」について論じる、たのもし、国際感覚豊かな青年へと成長していました。いつの日か、鹿児島とサラワク州の友好の記念植樹が実を付ける頃、協力隊員となった彼らと“Mari Kita Pregi Ke Kg, Telaga Air. (テラガアイール村へ行こう)”

最後にこの事業遂行にあたり、御協力頂きました国際協力事業団・青年海外協力隊事務局・サラワク州土地開発省・テラガアイール村の皆様へ感謝申し上げます。そして、この訪問手記が多くの人に読まれます事を熱望致します。

マリ キタ プルギ カ カンボン テラガ アイール
Mari Kita Pergi Ke Kg, Telaga Air

第 3 回 鹿児島県青少年海外協力体験事業

編集発行 鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

平成 5 年 10 月 1 日発行
